

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第31集

東北新幹線関係

埋蔵文化財発掘調査報告書

— II —

赤羽・伊奈氏屋敷跡

1 9 8 4

財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団





東北新幹線関係

埋蔵文化財発掘調査報告書

— II —

赤羽・伊奈氏屋敷跡

1 9 8 4



## 序

東京を起点とする東北新幹線建設計画は、上越新幹線とともに着工され、昭和57年大宮駅を暫定始発駅として開業いたしました。

この新幹線の建設に先立って埼玉県教育局文化財保護課では事前に路線内の遺跡の分布調査を実施し、日本国有鉄道と慎重に協議を重ねてまいりました。しかし路線決定に際して県指定史跡伊奈氏屋敷跡の一部を避けることが出来ず、やむなく発掘調査を実施し、記録保存を行うことになりました。発掘調査は、日本国有鉄道の委託を受けて、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施したものであります。

調査の結果、予想以上に埋蔵文化財の検出がありました。これらを記録保存したのが本報告書であります。

本書の刊行が、教育、学術、文化の一助となり、さらに文化財保護思想の普及啓蒙に、広く活用されることを念願しております。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、種々御協力をいただいた伊奈町教育委員会や地元および日本国有鉄道東京第三工事局の方々に深く感謝いたします。

昭和59年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長 五 郎



## 例　　言

- 1 本書は東北新幹線建設事業にかかる、北足立郡伊奈町小室に所在する、赤羽遺跡・伊奈氏屋敷跡の発掘調査報告である。
- 2 調査事業は埼玉県教育委員会が調整し、日本国有鉄道の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が、赤羽遺跡は昭和56年4月6日から56年9月25日に亘り、伊奈氏屋敷跡は昭和56年4月13日から昭和56年9月11日に亘って実施した。
- 3 出土品の整理及び図の作成は青木美代子が主にあたった。
- 4 発掘調査における写真は宮崎、酒井、山下が、遺物写真は今泉と青木が撮影した。
- 5 本書の執筆は青木、水村孝行、酒井清治、利根川章彦が主にあたったが、分担は次のとおりである。

保護課 I

青木 II、III-1、2、3（縄文）、4、IV-1、2、3（縄文）、4-(2)、(3)  
(4)

水村 IV-3（先土器時代）、4-(1)

酒井 IV-3（中近世）、4-(5)

利根川 III-3-(2)、(3)、4

なお、木材の樹種については鈴木三男、能城修一、植田弘生氏に、大型植物遺体については南木睦彦氏に、花粉・珪藻分析、地質分析、年代測定についてはパリノサーヴェイK.K.に依頼した。

- 6 本書の編集は調査研究第4課があたり、横川好富が監修した。
- 7 本書を作成するにあたり、下記の方々から御教示、御協力を得た。  
山下秀樹、井上肇、田中浩、杉山博、西ヶ谷恭弘、根岸茂夫、松村和男

# 目 次

## 序

## 例 言

I 発掘調査に至るまでの経過 .....	1
II 遺跡の立地と環境 .....	3
III 赤羽遺跡 .....	7
1. 遺跡の概観 .....	7
2. 発掘調査の経過 .....	8
3. 遺構と出土遺物 .....	13
(1) 繩文時代 .....	13
(2) 古墳時代～平安時代 .....	27
(3) 中・近世 .....	31
4. まとめ .....	42
IV 伊奈氏屋敷跡 .....	43
1. 遺跡の概観 .....	43
2. 発掘調査の経過 .....	44
3. 遺構と出土遺物 .....	48
(1) 先土器時代 .....	48
(2) 繩文時代 .....	68
a 台地部 .....	68
b 低湿地 .....	69
(3) 中・近世 .....	159
4. まとめ .....	168
(1) 石器について .....	168
(2) 低湿地遺跡について .....	174
(3) 出土土器について .....	175
(4) 木器について .....	180
(5) 伊奈氏屋敷について .....	182
V 付 編 .....	189
1. 伊奈氏屋敷跡出土木材の樹種 .....	189
2. 伊奈氏屋敷跡出土の大型植物遺体 .....	203
3. 伊奈氏屋敷跡花粉・珪藻分析 .....	213
4. 伊奈氏屋敷跡地質分析 .....	221
5. 伊奈氏屋敷跡年代測定 .....	231

## 挿 図 目 次

第1図 周辺の主要遺跡分布図	4	第28図 伊奈氏屋敷跡台地部基本層序図	48
第2図 遺跡周辺の地形図	6	第29図 伊奈氏屋敷跡石器分布図	53・54
第3図 赤羽遺跡グリッド配置図	9・10	第30図 伊奈氏屋敷跡N <sub>1</sub> ブロック出土石器	55
第4図 赤羽遺跡A、B地区遺構配置図	11・12	第31図 伊奈氏屋敷跡S <sub>1</sub> ブロック出土石 器(1)	56
第5図 赤羽遺跡C地区遺構配置図	13	第32図 伊奈氏屋敷跡S <sub>1</sub> ブロック出土石 器(2)	57
第6図 赤羽遺跡第1号住居跡	15	第33図 伊奈氏屋敷跡S <sub>1</sub> ブロック出土石 器(3)	58
第7図 赤羽遺跡第2号住居跡	16	第34図 伊奈氏屋敷跡S <sub>1</sub> ブロック出土石 器(4)	59
第8図 赤羽遺跡第3号住居跡	17	第35図 伊奈氏屋敷跡S <sub>1</sub> ブロック出土石 器(5)	60
第9図 赤羽遺跡第1号土壙	18	第36図 伊奈氏屋敷跡S <sub>1</sub> ブロック出土石 器(6)	61
第10図 赤羽遺跡第1、2、3号住居跡 出土土器拓影図	19	第37図 伊奈氏屋敷跡S <sub>1</sub> ブロック出土石 器(7)	62
第11図 赤羽遺跡グリッド出土土器拓影 図(1)	21	第38図 伊奈氏屋敷跡S <sub>2</sub> ブロック出土石器	63
第12図 赤羽遺跡グリッド出土土器拓影 図(2)	22	第39図 伊奈氏屋敷跡S <sub>2</sub> ブロック・砾器 ・グリッド出土石器	64
第13図 赤羽遺跡グリッド出土石器(1)	25	第40図 伊奈氏屋敷跡グリッド出土石器	65
第14図 赤羽遺跡グリッド出土石器(2)	26	第41図 伊奈氏屋敷跡低湿地出土石器	66
第15図 赤羽遺跡第1号方形周溝墓	28	第42図 伊奈氏屋敷跡台地部炉穴・土壙	67
第16図 赤羽遺跡第4号住居跡	29	第43図 伊奈氏屋敷跡グリッド出土土器	68
第17図 赤羽遺跡第4号住居跡出土土器 実測図	30	第44図 伊奈氏屋敷跡I-1区グリッド 割付け図	70
第18図 赤羽遺跡第1号井戸	31	第45図 伊奈氏屋敷跡I-1区遺物分布図	71
第19図 赤羽遺跡第1号溝(1)	32	第46図 伊奈氏屋敷跡I-2区グリッド 割付け図	72
第20図 赤羽遺跡第1号溝(2)	33	第47図 伊奈氏屋敷跡I-3区グリッド 割付け図	73
第21図 赤羽遺跡第1号炭焼窯(1)	34	第48図 伊奈氏屋敷跡I-4区グリッド 割付け図	73
第22図 赤羽遺跡第1号炭焼窯(2)	35	第49図 伊奈氏屋敷跡I-4区遺物分布図	74
第23図 赤羽遺跡グリッド出土の中・近 世遺物(1)	38		
第24図 赤羽遺跡グリッド出土の中・近 世遺物(2)	39		
第25図 赤羽遺跡グリッド出土の古銭・ 瓦・摺り鉢拓影図	40		
第26図 伊奈氏屋敷跡発掘区配置図	45・46		
第27図 伊奈氏屋敷跡台地部遺構分布図	47		

第50図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—5区グリッド 割付け図	75	第72図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—4区出土土器 実測図(1)	113
第51図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—5区遺物分布図	76	第73図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—4区出土土器 実測図(2)	114
第52図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—1区グリッド 割付け図	77	第74図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—4区出土土器 実測図(3)	115
第53図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—2区グリッド 割付け図	77	第75図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—4区出土土器 実測図(4)	116
第54図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—3区グリッド 割付け図	78	第76図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—4区出土土器 実測図(5)	117
第55図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—3区遺物分布図	79	第77図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—4区出土土器 実測図(6)	118
第56図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—4区グリッド 割付け図	80	第78図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—4区出土土器 実測図(7)	119
第57図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—4区遺物分布図	81	第79図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—4区出土土器 実測図(8)	120
第58図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—1区土層断面 図	85・86	第80図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—4区出土土器 拓影図(1)	121
第59図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—2区土層断面 図	87・88	第81図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—4区出土土器 拓影図(2)	122
第60図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—3区土層断面図	89	第82図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—4区出土土器 拓影図(3)	123
第61図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—4区土層断面図	90	第83図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—4区出土土器 拓影図(4)	124
第62図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—5区土層断面図	92	第84図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—4区出土土器 拓影図(5)	125
第63図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—1区土層断面図	93	第85図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—5区出土土器 実測図	127
第64図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—2区土層断面図	94	第86図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—5区出土土器 拓影図(1)	128
第65図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—3区土層断面 図(1)	95・96	第87図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—5区出土土器 拓影図(2)	129
第66図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—3区土層断面 図(2)	98	第88図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—3区出土土器 実測図(1)	133
第67図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—4区土層断面 図	99・100	第89図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—3区出土土器 実測図(2)	134
第68図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—1区出土土器 実測図	102		
第69図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—1区出土土器 拓影図	103		
第70図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—2区出土土器 実測図	105		
第71図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—2区出土土器 拓影図	106		

第90図	伊奈氏屋敷跡Ⅰ—3区出土土器 実測図(3).....	135	第106図	伊奈氏屋敷跡木製品実測図(4).....	156
第91図	伊奈氏屋敷跡Ⅰ—3区出土土器 拓影図(1).....	136	第107図	伊奈氏屋敷跡木製品実測図(5).....	157
第92図	伊奈氏屋敷跡Ⅰ—3区出土土器 拓影図(2).....	137	第108図	伊奈氏屋敷跡木製品実測図(6).....	158
第93図	伊奈氏屋敷跡Ⅰ—3区出土土器 拓影図(3).....	138	第109図	伊奈氏屋敷跡Ⅰ—4区東区溝.....	162
第94図	伊奈氏屋敷跡Ⅰ—3区出土土器 拓影図(4).....	139	第110図	伊奈氏屋敷跡Ⅰ—5区東区掘障 子(1).....	164
第95図	伊奈氏屋敷跡Ⅰ—3区出土土器 拓影図(5).....	140	第111図	伊奈氏屋敷跡Ⅰ—5区東区掘障 子(2).....	165
第96図	伊奈氏屋敷跡Ⅰ—4区出土土器 実測図.....	142	第112図	伊奈氏屋敷跡Ⅰ—3区埋立の構.....	167
第97図	伊奈氏屋敷跡Ⅰ—4区出土土器 拓影図(1).....	143	第113図	伊奈氏屋敷跡土器変遷図(1).....	178
第98図	伊奈氏屋敷跡Ⅰ—4区出土土器 拓影図(2).....	144	第114図	伊奈氏屋敷跡土器変遷図(2).....	179
第99図	伊奈氏屋敷跡Ⅰ—4区出土土器 器実測図.....	147	第115図	伊奈氏屋敷跡木製品出土位置図.....	181
第100図	伊奈氏屋敷跡Ⅰ—4区出土土器 器拓影図.....	147	第116図	新編武藏風土記稿伊奈熊藏陣屋 図.....	183
第101図	伊奈氏屋敷跡石器実測図(1).....	149	第117図	伊奈氏屋敷跡絵面図(嘉永3年 絵地図より).....	183
第102図	伊奈氏屋敷跡石器実測図(2).....	150	第118図	伊奈氏屋敷跡グリッド割付け概 略図.....	203
第103図	伊奈氏屋敷跡木製品実測図(1).....	153	第119図	ヒシ属の各部位の名称.....	207
第104図	伊奈氏屋敷跡木製品実測図(2).....	154	第120図	伊奈氏屋敷跡花粉・珪藻・C <sup>14</sup> 分 析サンプリング位置図.....	214
第105図	伊奈氏屋敷跡木製品実測図(3).....	155	第121図	伊奈氏屋敷跡地質調査位置図.....	227
			附図1	伊奈氏屋敷跡地形図	
			附図2	伊奈氏屋敷跡溝地形図	
			附図3	伊奈氏屋敷跡戸掘地形図	

## 表 目 次

第1表	周辺の埋蔵文化財包蔵地名表.....	5	測表.....	172・173	
第2表	赤羽遺跡石器計測表.....	26	第6表	伊奈氏屋敷跡樹種調査区分標本 点数表.....	199
第3表	伊奈氏屋敷跡縄文時代石器計測 表.....	148	第7表	伊奈氏屋敷跡層序表.....	204
第4表	伊奈氏屋敷跡木製品計測表.....	152	第8表	花粉ダイアグラム.....	215
第5表	伊奈氏屋敷跡先土器時代石器計 測表.....		第9表	伊奈氏屋敷跡Ⅰ—1区花粉帶及	

び草木類の産出傾向表	219	点	233
第10表 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—5区花粉及び 草本類の産出傾向表	220	第15表 伊奈氏屋敷跡地質柱状図第5地 点	234
第11表 伊奈氏屋敷跡地質柱状図第1地 点	230	附表1 伊奈氏屋敷跡大型植物遺体調査区別標 本点数	
第12表 伊奈氏屋敷跡地質柱状図第2地 点	231	附表2 伊奈氏屋敷跡花粉ダイアグラム(1)	
第13表 伊奈氏屋敷跡地質柱状図第3地 点	232	附表3 伊奈氏屋敷跡花粉ダイアグラム(2)	
第14表 伊奈氏屋敷跡地質柱状図第4地		附表4 伊奈氏屋敷跡花粉ダイアグラム(3)	
		附表5 伊奈氏屋敷跡花粉ダイアグラム(4)	

## 図版目次

- 図版1 1. A区遠景  
2. 1号住居跡
- 図版2 1. 2号住居跡  
2. 3号住居跡
- 図版3 1. 4号住居跡(1)  
2. 4号住居跡(2)
- 図版4 1. 1号土壙  
2. 方形周溝墓
- 図版5 1. 炭焼窯  
2. 溝
- 図版6 1. 1、2号住居跡出土土器  
2. 3号住居跡出土土器
- 図版7 1. グリッド出土土器(1)  
2. グリッド出土土器(2)
- 図版8 1. 4号住居跡出土土器  
2. グリッド・表土の中近世遺物
- 図版9 1. 伊奈氏屋敷跡遠景  
2. 台地部近景
- 図版10 1. 1号土壙  
2. 2号土壙
- 図版11 底湿地近景(1)～(8)
- 図版12 調査区近景(1)～(7)
- 図版13 1. 1号丸木舟  
2. I—2区土層断面
- 図版14 1. 2号丸木舟  
2. I—5区出土弓
- 図版15 1. I—3区埋立のサク(1)  
2. I—3区埋立のサク(2)
- 図版16 1. I—4東区溝  
2. I—5東区畝縄
- 図版17 丸木舟取り上げ状況(1)～(6)
- 図版18 1. N<sub>1</sub>ブロック出土石器  
2. S<sub>1</sub>ブロック出土土器(1)
- 図版19 1. S<sub>1</sub>ブロック出土石器(2)
2. S<sub>1</sub>ブロック出土石器(3)
- 図版20 1. S<sub>1</sub>ブロック出土石器  
2. S<sub>1</sub>ブロック出土石器
- 図版21 1. グリッド出土石器  
2. 低湿地出土石器
- 図版22 1. I—1区出土土器  
2. I—2区出土土器  
3～5. I—4区出土土器
- 図版23 1～8. I—4区出土土器
- 図版24 1～2. I—5区出土土器  
3～7. I～3区出土土器
- 図版25 1～4. I—4区出土土器  
5. I—4東区出土土器
- 図版26 I—1区出土土器
- 図版27 1. I—1区出土土器  
2. I—4区出土土器(1)
- 図版28 1. I—4区出土土器(2)  
2. I—4区出土土器(3)
- 図版29 1. I—4区出土土器(4)  
2. I—4区出土土器(5)
- 図版30 1. I—4区出土土器(6)  
2. I—4区出土土器(7)
- 図版31 1. I—4区出土土器(8)  
2. I—5区出土土器(1)
- 図版32 1. I—5区出土土器(2)  
2. I—5区出土土器(3)
- 図版33 1. I—3区出土土器(1)  
2. I—3区出土土器(2)
- 図版34 1. I—3区出土土器(3)  
2. I—3区出土土器(4)
- 図版35 1. I—3区出土土器(5)  
2. I—4区出土土器(1)
- 図版36 1. I—4区出土土器(2)

2. Ⅱ—4区出土土器(3)

- 図版37 木製品(1)  
図版38 木製品(2)  
図版39 木製品(3)  
図版40 木製品(4)  
図版41 木製品(5)  
図版42 1. 焼けた木(1)—a  
2. 焼けた木(1)—b  
図版43 1. 焼けた木(2)  
2. 焼けた木(3)  
図版44 樹種 顕微鏡写真(1)  
図版45 樹種 顕微鏡写真(2)  
図版46 樹種 顕微鏡写真(3)  
図版47 樹種 顕微鏡写真(4)  
図版48 樹種 顕微鏡写真(5)

- 図版49 樹種 顕微鏡写真(6)  
図版50 樹種 顕微鏡写真(7)  
図版51 樹種 顕微鏡写真(8)  
図版52 樹種 顕微鏡写真(9)  
図版53 樹種 顕微鏡写真(10)  
図版54 樹種 顕微鏡写真(11)  
図版55 樹種 顕微鏡写真(12)  
図版56 樹種 顕微鏡写真(13)  
図版57 樹種 顕微鏡写真(14)  
図版58 大型植物遺体(1)  
図版59 大型植物遺体(2)  
図版60 大型植物遺体(3)  
図版61 大型植物遺体(4)  
図版62 大型植物遺体(5)  
図版63 大型植物遺体(6)

## I 発掘調査に至るまでの経過

東北新幹線のルートは、昭和46年10月15日に開催された「埼玉県行政推進対策委員会軌道交通部会」において建設当局の日本国有鉄道から、20万分の1の地図上に引かれたルートによって建設概要の説明があり若干の質疑が行われた。続いて、昭和46年10月22日及び11月18日に開催された「軌道交通部会」において、新幹線の設計協議に対する県の基会的態度について、各課の意見が聴取された。文化財保護の面では、国及び県指定文化財及び周知の遺跡については路線計画からはずすこと。また、その他の埋蔵文化財包蔵地については、損傷を最少限度にとどめてルートを決定するよう要望した。埋蔵文化財の所在と取り扱いについては、特に注意が払われ、他の関連公共事業とは切りはなして協議を進めることになった。

昭和47年11月初旬、日本国有鉄道東京第三工事局長から2500分の1の計画路線図が届けられた。文化財保護課では、11月20日、21日の両日に遺跡分布調査を実施した。そして、「東北新幹線建設用地（大宮～栗橋間）内における文化財の所在および取り扱いについて」昭和48年3月19日付け教文第1168号をもって県教育長から日本国有鉄道東京第三工事局長あて通知した。その内容は大旨次のようなものである。

1. 建設予定地内には、県指定史跡伊奈氏屋敷跡及び埋蔵文化財包蔵地3遺跡（伊奈1号、伊奈2号、白岡1号）が所在すること。
2. 上記文化財の取り扱いについて、県指定史跡については、現状変更許可申請書を提出すること。埋蔵文化財については記録保存の措置を講ずること。埋蔵文化財の記録保存にあたっては文化財保護課と十分協議すること。

これを受けて、埋蔵文化財の発掘調査について東京第三工事局と文化財保護課で協議を重ねた結果、発掘調査は文化財保護課が直接実施していく事が決定した。東京第三工事局からの委託を受けた文化財保護課では、昭和51年1月～3月に白岡1号遺跡の発掘調査をまず実施した。

また、その後の分布調査等により上尾地区で新たに遺跡（上尾1号遺跡）が発見され、伊奈地区的遺跡についても範囲等が確定した。そこで、昭和55年3月25日付け教文第1347号をもって「東北新幹線上尾、伊奈地区内における文化財の所在及び取り扱いについて」日本国有鉄道東京第三工事局長あて改めて通知した。

伊奈・上尾地区における建設計画も昭和55年には進展をみせ、発掘調査についての具体的な協議が行われた。その結果、昭和56年4月から赤羽遺跡、伊奈氏屋敷跡の発掘調査を実施する事が合意された。日本国有鉄道東京第三工事局から文化財保護法第57条の3に基づく発掘通知を、県教育委員会から文化財保護法第98条の2に基づく発掘調査通知を文化庁へ提出した後、発掘調査は開始された。文化庁からは、昭和56年5月14日付けで委保5の1247号を持って受理した旨通知があった。

また、昭和55年度以降の発掘調査は、増大する公共事業に対処するために設立された財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に引き継がれた。

## 発掘調査の組織

### 1. 発掘

主 体 者 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 長 井 五 郎

副理事長 沼 尻 和 也

常務理事 渡 辺 澄 夫

庶務管理 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

管理部長 伊 藤 悅 光

関 野 栄 一

福 田 浩

本 庄 朗 人

発 掘 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

調査研究部長 横 川 好 富

調査研究第一課長 高 橋 一 夫

宮 崎 朝 雄

酒 井 清 治

山 下 秀 樹

利根川 章 彦

### 2. 整理

主 体 者 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 長 井 五 郎

副理事長 岩 上 進

常務理事 石 川 正 美

庶務管理 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

管理部長 佐 肇 長 二

関 野 栄 一

江 田 和 美

福 田 啓 子

福 田 浩

本 庄 朗 人

整 理 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

調査研究部長 横 川 好 富

調査研究副部長 小 川 良 祐

調査研究第四課長 今 泉 泰 之

青 木 美 代 子

## II 遺跡の立地と環境

伊奈氏屋敷跡および赤羽遺跡はそれぞれ、埼玉県北足立郡伊奈町小室字丸山906他、および赤羽4813—2他に所在する。調査対象部分は、伊奈氏屋敷跡に関するものと、台地部に分かれるため前者を伊奈氏屋敷跡、後者を赤羽遺跡とした。当地は、国鉄高崎線上尾駅と国鉄東北本線蓮田駅を直線で結んだほぼ中間の地点に当る。又上越新幹線に付随して大宮駅から羽貫駅間を走る、埼玉新都市交通の丸山駅から南方約250mの地点に位置する。

遺跡は所謂大宮台地上の東北端に位置する。大宮台地は鴻巣市付近に端を発し、浦和市や鳩ヶ谷市まで連なる南北に細長い洪積台地であり、西部は荒川低地により、東は中川低地により他の台地から分断されている。標高は約10~20mを測り、北部に向って徐々に高くなっている。また、この台地は、開拓谷の発達によって大宮主台、指扇、大和田片柳、鳩ヶ谷、岩槻、慈恩寺の各支台に分断されている。

伊奈氏屋敷跡・赤羽遺跡は、大和田片柳支台に属し、その基部から分岐し独立した小支台である小室支台の南端部に位置している。先端部では東側を流れる綾瀬川と、西側を流れて綾瀬川と合流する落し掘に挟まれ、また北に延びる支谷が発達し、先端部を大きく三分している。両遺跡は三分された中央の台地および台地西側の底湿地に当る。標高は約14m前後を測り、水田面からの比高差は約3~4mを測る。

以上のような地形的環境であるが、次に、伊奈町周辺の歴史的環境について述べてみたい。

当遺跡のある小支台では約70ヶ所におよぶ遺跡が確認されている。

先土器時代の遺跡は、台地の縁辺部に位置しており、久保山遺跡ではナイフ形石器を伴うブロッタクが1ヶ所検出されている。

縄文時代の遺跡は、中期を中心とし、早・前・後・晚期の遺跡が揃っている。前期では綾瀬川右岸にある県指定史跡となつた小見戸貝塚が存在する。久保山遺跡では、野島式土器を伴う炉穴が8基、加曾利E式期の住居跡5軒が認められた。北遺跡では勝坂式期から加曾利EⅡ式期の住居跡が75軒、同期の土壙が約250基検出されている。原遺跡では中期の住居跡が12軒、土壙7基が調査されている。志久遺跡では加曾利EⅠ~Ⅲ式期の住居跡10軒が検出されている。小室天神前遺跡では加曾利EⅢ式期の住居跡2軒が検出されており、近接する大山遺跡では16軒の住居跡が検出されている。氷川神社裏遺跡では晩期安行Ⅰ~Ⅲ式の土器が散布している。なお低湿地遺跡の調査は、大宮市の芝川低地で寿能泥炭層遺跡の調査が行なわれ、多期にわたり多数の遺物が出土した例がある。

弥生時代から平安時代の遺跡では、大山遺跡で検出された平安時代の製鐵遺構およびそれに伴う住居跡が著名である。原遺跡では方形周溝墓2基、炭焼窯、溝等が検出されている。向原遺跡では弥生時代後期吉ヶ谷式期の住居跡2軒、弥生時代末~古墳時代初頭の住居跡19軒、方形周溝墓2基、炭焼窯、溝が検出されている。

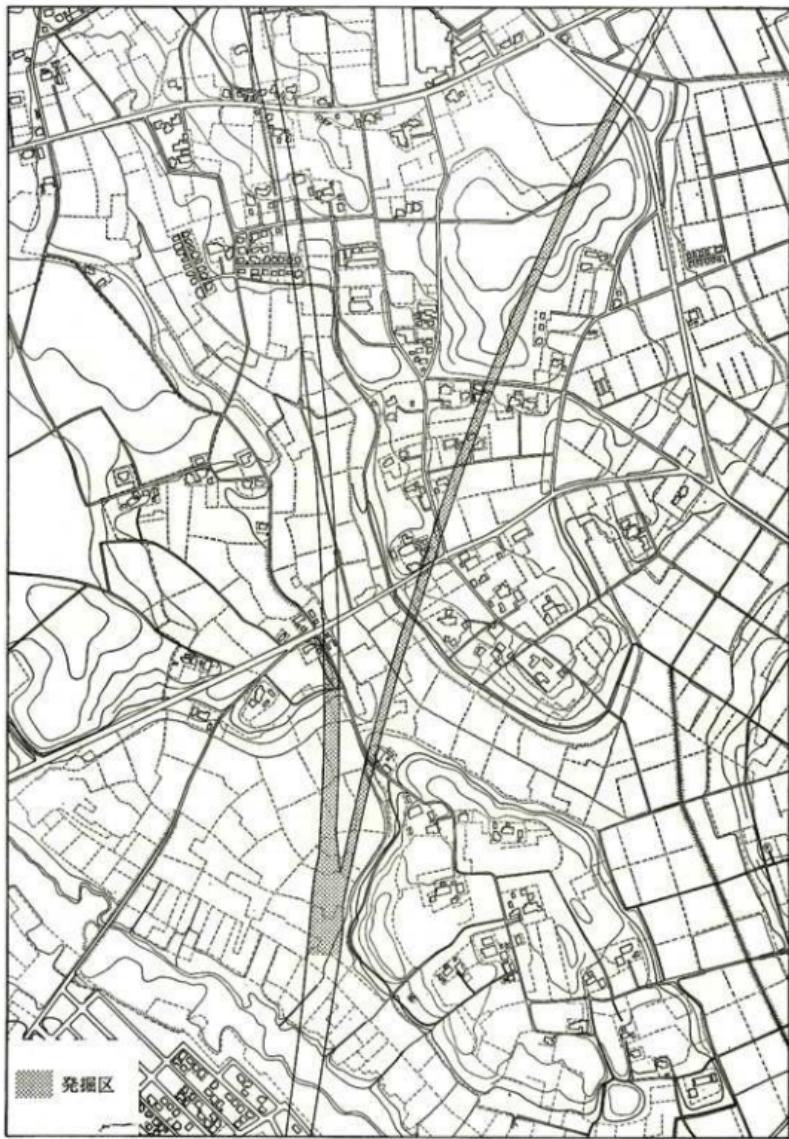
また、室町時代の大針の細田城、内宿の春日山陣屋跡等各時代をとらしての屋館が存在し、当地域が、歴史の舞台としても極めて重要な拠点として位置付けられていたことがうかがえる。



第1図 周辺の主要遺跡分布図

第1表 周辺の埋蔵文化財包蔵地地名表

番号	名 称	所 在 地	時 代・そ の 他
1	入郷地遺跡	白岡町大字白岡字茶屋	縄文中期～晚期前半
2	茶屋遺跡	白岡町大字白岡字茶屋	縄文中期～後期、古墳時代初頭 昭和57年発掘調査（コミュニティセンターと児童館の併設館（仮称）の工事のため）
3	新星敷遺跡	白岡町大字白岡字茶屋	縄文早期～後期
4	山遺跡	白岡町大字白岡字山	縄文早期～中期
5	タタラ山遺跡	白岡町大字白岡字山	縄文前期・中期
6	城	蓮田市大字黒浜字城	室町
7	上闇戸貝塚	蓮田市大字闇戸字栗崎3775	縄文前期
8	綾瀬貝塚	蓮田市貝塚字塚本799他	縄文前期・中期
9	十三塚古墳群	蓮田市大字闇戸字野久保	古墳時代後期
10	闇戸貝塚	蓮田市大字闇戸1	縄文前期関山式期 1974「関山貝塚」埼玉県埋蔵文化財調査報告書第3集
11	坂堂貝塚	蓮田市大字下蓮田字坂堂	縄文前期
12	八幡谷遺跡	伊奈町羽貫字八幡谷204-1	中世～近世
			上越新幹線建設のため昭和56年発掘調査
13	原遺跡	伊奈町大字羽貫861	縄文中期・古墳時代、中世～近世
14	北遺跡	伊奈町大字大針字原679-1	上越新幹線建設のため昭和56～昭和58年発掘調査 先土器時代、縄文中期・近世
15	小貝戸貝塚	伊奈町大字小室字本郷	上越新幹線建設のため昭和55～昭和56年発掘調査
16	上新田遺跡	伊奈町小室字上新田5062他	縄文
			江戸時代以後の溝
17	氷川神社裏遺跡	伊奈町大字小室字本上 字元宿	上越新幹線建設のため昭和55～昭和56年発掘調査 縄文晚期 1980「埼玉県北足立郡伊奈町氷川神社採集の縄文土器資料」金鈴22号
18	小室天神前遺跡	伊奈町大字小室字精進場 10231-1他	縄文中期、弥生時代終末期 1981「小室天神前遺跡」
19	西浦遺跡	伊奈町大字小室字西浦 4962-1他	近世の遺物を伴う溝 上越新幹線建設のため昭和55年発掘調査
20	志久遺跡	伊奈町大字小室字志久 赤羽	縄文中期 1976「志久遺跡」埼玉県遺跡調査会報告書第31集
21	久保山遺跡	伊奈町字田妻5406他	先土器時代、縄文早期～後期
22	丸山遺跡	伊奈町大字小室字大山 字丸山	1983「久保山」埼玉県埋蔵文化財調査事団報告書第29集 先土器時代、縄文時代・平安時代
23	大山遺跡	伊奈町大字小室字大山1832	上越新幹線建設のため昭和56年発掘調査 縄文中期、古墳・奈良・平安時代・近世
			1979・1982「大山」
24	赤羽遺跡	伊奈町大字赤羽4313-2他	縄文中期・古墳時代
25	伊奈氏屋敷跡	伊奈町大字小室字丸山 906他	先土器時代、縄文後～晚期、江戸時代
26	諏訪坂貝塚	上尾市大字原市13番耕地	縄文中期・後期
27	尾山台遺跡	上尾市大字尾山	弥生後期
28	九ヶ崎館跡	大宮市大字九ヶ崎	不明
29	貝崎貝塚 (深作貝塚)	大宮市大字深作字貝崎、 字小海崎	縄文早期～後期、古墳時代後期、平安時代



第2図 遺跡周辺の地形図

### III 赤羽遺跡

#### 1. 遺跡の概観

赤羽遺跡は大宮台地小室支台南西部に所在している。遺跡は支台の平坦面から傾斜面上にかけて、新幹線の路線幅に沿って細長く広がっている。

遺跡中央の平坦面での標高は13~14mであり、比高差は4~5mを測る。A・B区は多少の高低はあるものの、殆んど平坦な面を保っており、C区は台地の肩部に当っている。遺跡のすぐ西側、台地の西端部には大山遺跡があり、先土器時代から平安時代にわたっての遺構遺物が多数検出されている。また、傾斜面下は水田になって、泥炭が発達しており、伊奈氏屋敷跡台地下は泥炭遺跡となっている。

発掘調査は、町道により分割し、北からA・B・C区とした。A・B区は路線に沿い10×10mの大グリッドを設定し、併せて標高を求めて基準杭とした。グリッドは北から南へ1~9。西から東へA~Dに分割し、各大グリッドを1~A、1~B区を呼称した。B区とC区間の間約26mにわたっては、遺構確認の時点ではほとんど検出されず、またゴミ穴等による擾乱が激しく、瓦片、陶器片が若干採集されたのみであったためグリッドは組まず調査は終えた。C区は新たにグリッドの設定を行ない、南から北へ1~6・東から西へA~Eに分割し、大グリッドを設定した。大グリッド内にはそれぞれ、1辺2mの小グリッドを設定し調査を進めた。遺構確認面であるローム面までは、1層表土、2層茶褐色土、3層淡褐色土で50cm堆積している。

遺跡確認作業は、調査前の地目が雑木林及び住宅地であったため表土を重機で排除し、木の抜根及び遺構の検出を人力で行った。

調査は14600m<sup>2</sup>にわたって行われたが、集落の中心は西側に位置する大山遺跡にあるためか遺構はあまり検出されなかった。

調査の結果、住居跡が4軒（縄文時代中期3、平安時代1）、方形周溝墓が1基、縄文時代の土壙が1基、炭焼窯が1基、井戸が1基、溝状遺構1本が検出された。

縄文時代中期の住居跡はA区の11~15-C~Dの調査区で検出されたものである。各住居跡も状態が悪く、1号住居跡の半分は方形周溝墓に切られ残りも擾乱を受けており、少量の加曾利Eの土器片が出土するのみである。2号住は土器片が集中して出土しているため調査を行った所、床面と柱穴が2本検出されただけであり、壁の立ち上がりは認められなかった。3号住は、発掘区の端に検出されたため大半が調査区外にかかってしまい、坪も認められなかった。

平安時代の住居跡はA区の27-C・D区から検出された。住居の南側一部で擾乱を受けているが、カマド周辺からは甕等が出土している。

炭焼窯はC区の台地肩部に作られ、傾斜を利用して作成されている。

溝状遺構はC区の平坦面から斜面移行部にL字状に屈曲して検出された。斜面部の溝は深く作ってあるが、平坦部は浅くなっている、一部切れている所もある。覆土からは擂鉢・瓦等が出土している。

## 2. 調査の経過

赤羽遺跡の発掘調査は、昭和56年4月6日から56年9月25日までの約6ヶ月で実施された。遺跡は小室支台の先端部に位置している。

以下に、発掘調査の進行状況を月毎に記しておきたい。

4月 路線に沿い10m×10mの大グリッドを設定し、北から表面精査を行い遺構確認及び大木の抜根作業を行う。A区から調査に入り、まずC-11区を中心に方形周溝墓、及び西溝の所に住居跡が確認された。住居跡からは加曾利EⅡ式期の土器片が出土している。1号は方形周溝墓に切られ、残存する半分は木の根で床面を荒らされており、良好に保存されていない。以後1号住居跡とする。方形周溝墓・1号住居跡の実測・写真撮影を行いながら18-A・B・C・D区まで表面精査を進める。14-D区・15-D区から各1軒ずつ住居跡が確認され、2・3号住居跡とし、調査を開始する。

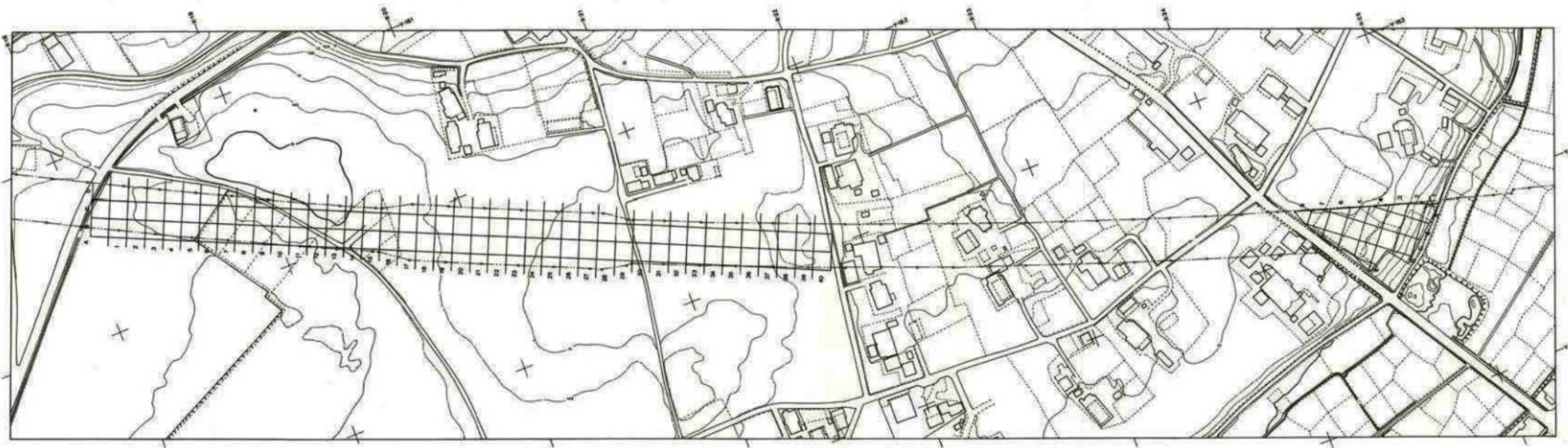
5月 2号住居跡は床面がすでに出てしまっており、柱穴のみ確認できた。3号住は大半が路線外にかかってしまっている。共に加曾利E式期の土器片が出土している。17列から26列までは板石塔婆のみが検出された。A区の27-D区で4号住居跡を確認し調査を始める。住居跡は長方形のプランを呈する国分期のものであった。表面精査はA区を終え、B区に入る。A区とB区の間は30mにわたり落ち込んでおり、黒色土が厚く堆積し中央では20cmほど低くなっていた。B区では遺物の出土もほとんど無く、遺構は僅かに井戸・土壤の各1基が検出されたにすぎない。

6月 2・3・4号住居跡・井戸・土壤の実測、写真撮影を行う。A区の作業はすべて終了する。B区とC区の間には家がまだ残っており、調査が行える所から重機により表土を除去し遺構の確認を進める。

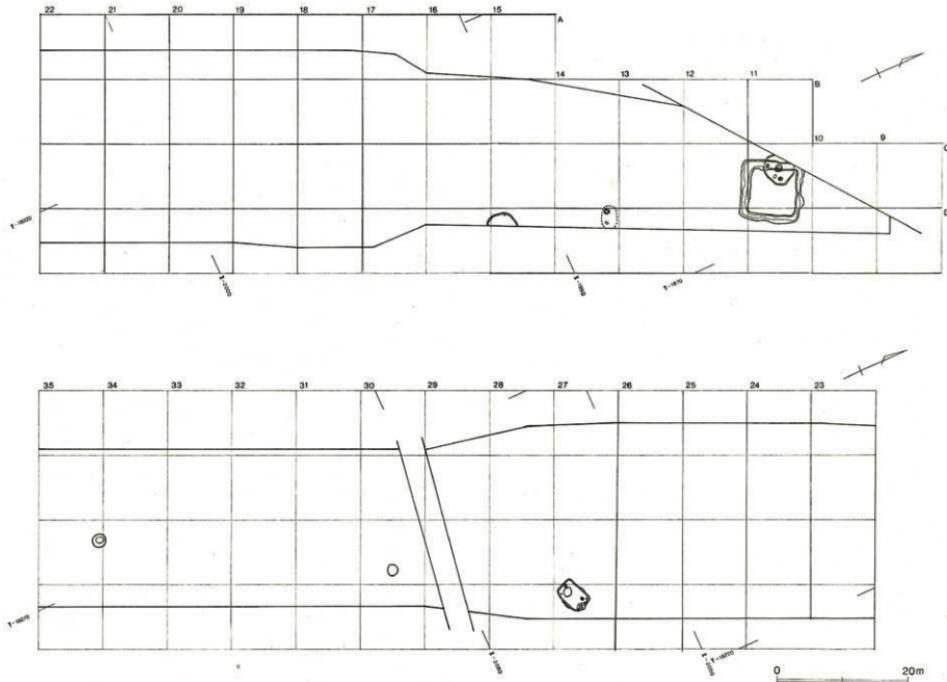
7月 C区とB区の間は、ひき続いて遺構確認作業を行うが、遺物は瓦片等しかなく、遺構も全く認められず調査を終了した。C区は新たにグリッドを設定し遺構確認作業を行う。L字形に屈曲する黒色の帯状の落ち込みと、台地斜面下方東端に炭が出土する所が確認された。帯状の溝は当初方形周溝墓と思われたが、瓦・土瓶等の遺物が検出され、近世の遺構と確認された。

8月 炭は炭焼窯に伴うものと確認され、調査を進める。斜面を利用し長円形を呈したもので、斜面下が焼き口となっている。側縁はよく焼けて堅くなっていたが、天井は落ちており、炭及びその他の遺物は認められなかった。溝は細長いため多く土層断面図を作成し、後、炭焼窯と共に平面図の作製を行い、精査して写真撮影を行った。

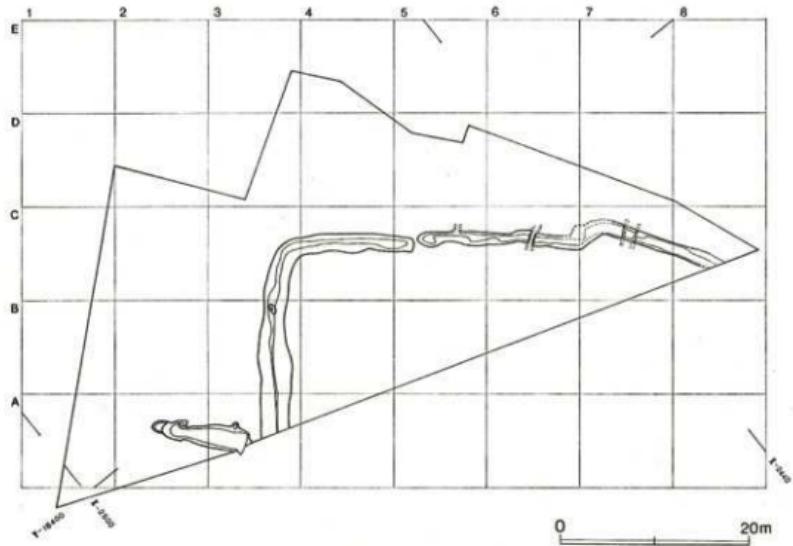
9月 溝・炭焼窯の調査終了後、C区は台地斜面部に位置する関係から先土器時代の遺物の出土の可能性も認められたため、2×2m区画でローム層を掘り下げた。しかし、遺構・遺物は認められず、25日にすべての調査を終了した。



第3図 赤羽遺跡グリッド配置図



第4図 赤羽道路A・B地区造構配置図



第5図 赤羽遺跡C地区遺構配置図

### 3. 遺構と出土遺物

#### (1) 繩文時代

繩文時代の遺構は、台地の平坦部にあり、調査区の北側に位置している。住居跡はA区の11～15—C・D区に3軒が散在して検出されている。他の遺構に切られている住居跡、調査区外に入ってしまっているものなどいすれも完全な形で住居跡が検出されたものはない。遺物はポリコンテナに3箱分の土器片が出土したのみで、埋甕・炉体土器等は検出されなかった。土壇はB区で検出されたもので住居跡と土壇ははなれて存している。近隣の大山遺跡では住居跡が15軒、土壇が116基認められているため、中心はそちらにあるものと推察される。

#### 遺構

##### 第1号住居跡（第6図）

A区の11—C区で検出された。北端は調査区外にあたり未調査である。中央が方形周溝墓の溝により切られている。

プランは橢円形を呈し、直径4.7m前後を測る。壁高は30cmである。柱穴は壁付近に2個検出されている。床面の状態は、一部方形周溝墓により切られ、残りの部分は木の根で荒らされ良好でない。炉は地床炉で2ヶ所認められた。出土遺物は加曾利EⅡ式の土器が小量認められた。

### 第2号住居跡（第7図）

A区の14—C・D区で検出された。当初、土器小片のみが出土して遺構の確認が不明瞭であった。途中焼土が確認されるに至って住居跡としたものであり、壁の立ち上がりは検出できなかつた。そのため遺構の形態は不明確である。規模は遺物の散布状態から、直径4m前後と考えられる。床面の状態も不安定であった。柱穴は検出されなかつた。炉は2ヶ所検出された。遺物は加曾利E II式の土器片が僅かに出土している。

### 第3号住居跡（第8図）

A区の15・16—D区にかけて位置しており、大半は15—D区に所在する。東半分が調査区外にあたり、未調査である。

住居跡のプランは円形を呈するものであり、残存部の状態から直径4.8m程度の規模になると推察される。壁高は36cmでだらかに立ち上っている。柱穴は壁近辺に一個検出されており、深度は床面より56cmをはかる。炉は検出されなかつた。

土層は表土から、1層表土で黒色土、2層はローム粒子を微量に含む褐色土、3層はしまりのやや悪い、ロームブロックを少量含み、少量炭化物を含む黄褐色土、4層はしまりの悪いロームブロックを多量に含有する淡褐色土、5層是非常にかたい黒褐色土、6層は4層よりやや暗い淡褐色土、7層はロームを主体とする3層より明るい黄褐色土。

出土遺物は加曾利E II式の土器片が少量出土している。

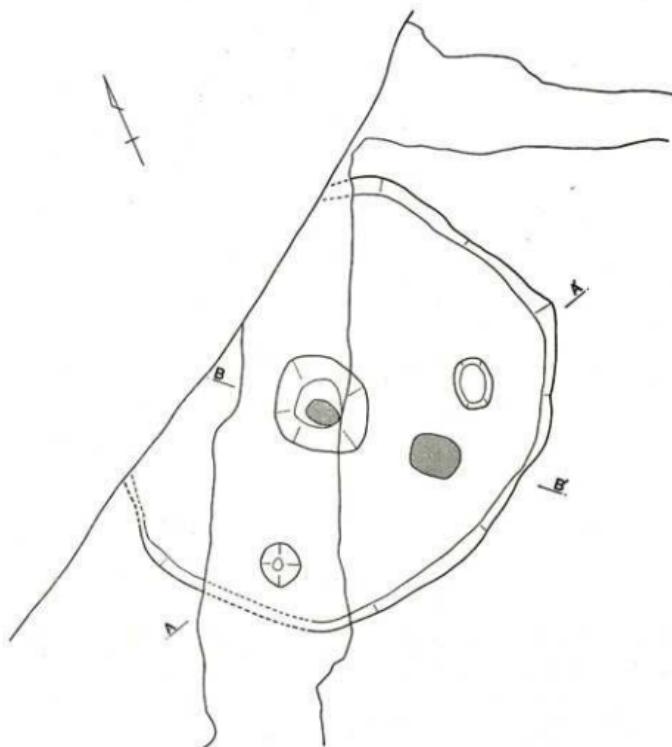
### 第1号土壤（第9図）

B区の34・35—C区で検出された。形態はほぼ円形であり直径は1mを測る。フラスコ状に近い掘り込みである。土層は、1層しまりの良い黒褐色土、2層赤褐色土、3層少量のロームブロックを含む暗褐色土、4層しまりの悪い微量のロームブロックを含有する明褐色土、5層粘土質のロームを含む黄褐色土である。

## 遺物

### 第1号住居跡出土土器（第10図1～8）

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
10—1	3	縫帶で渦巻文が描出され、その間には沈線が施文されている。地文は繩文L Rが施文される。	胎土は緻密で砂粒・小石粒を多く含む。焼成は良好、表面とも橙褐色を呈する。	
2・3	3	2本の沈線間が磨消される懸垂文を持つ。地文は繩文L Rが縱方向に施文される。	胎土は緻密で、3は白色粒が目立つ。焼成は良好である。色調は2が暗褐色、3が橙褐色を呈する。	
4・5	3	口縁は2本の沈線が巡り、3本対による沈線が垂下する。地文は捺糸しである。	胎土は緻密であり、焼成は良好である。色調は橙褐色を呈する。	4と5は同一個体である。
6	3	口縁部が緩く内凹する。口唇下に幅の広い沈線帯を有し、沈線内には波状に縫帶をはり	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は暗赤褐色を呈する。	



A 1103m

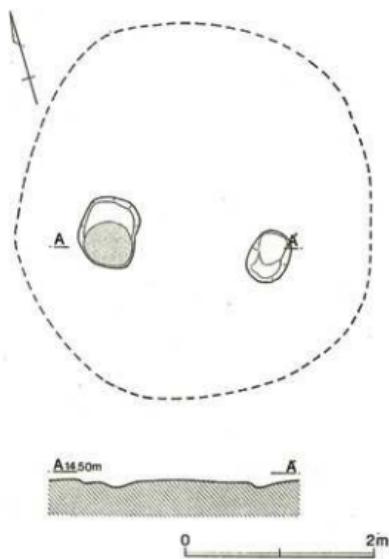


B 1103m



0 2m

第6図 赤羽遺跡第1号住居跡

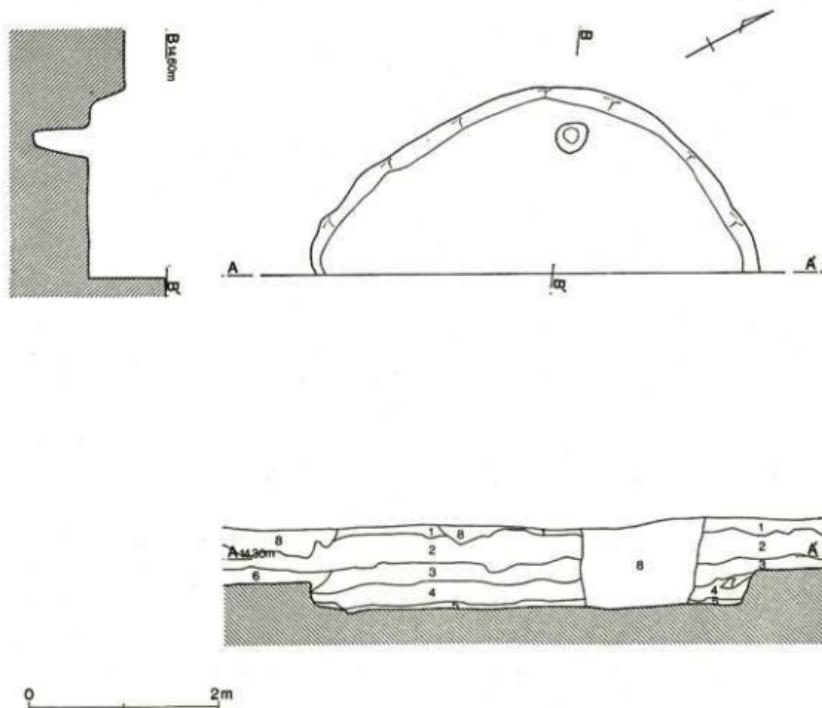


第7図 赤羽遺跡第2号住居跡

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
10—7	3	つけ、波状間を上下から棒状工具により刺突を行いを鋸歯状を作り出している。胴部には連弧文が施文されている。地文は縄文RLが施文されている。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。	
8	3	口縁が開く無文の浅鉢である。口唇部は肥厚しない。	胎土は緻密で、砂粒、白色粒が目立つ。色調は橙褐色を呈する。	

第2号住居跡出土土器（第10図9～11）

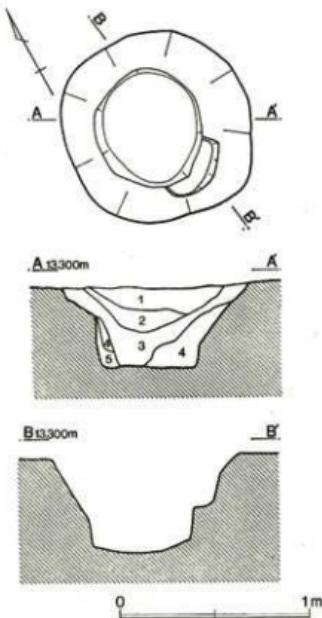
番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
10—9	3	口唇部下に隆帯が巡り、隆帯と沈線で区画文が構成されるものである。縄文LRが横向に施文される。	胎土は緻密で、砂粒を多く含み、白色粒が目立つ。焼成は良好。赤褐色を呈する。	
10 11	3	連弧文土器の胴部破片である。10は幅広の沈線が施文されている。11は2本対の沈線が認められる。地文は、いずれも燃糞Lである。	胎土は白色粒が目立つ。焼成は良好。色調は10が橙褐色を呈する。11は赤褐色を呈する。	



第8図 赤羽遺跡第3号住居跡

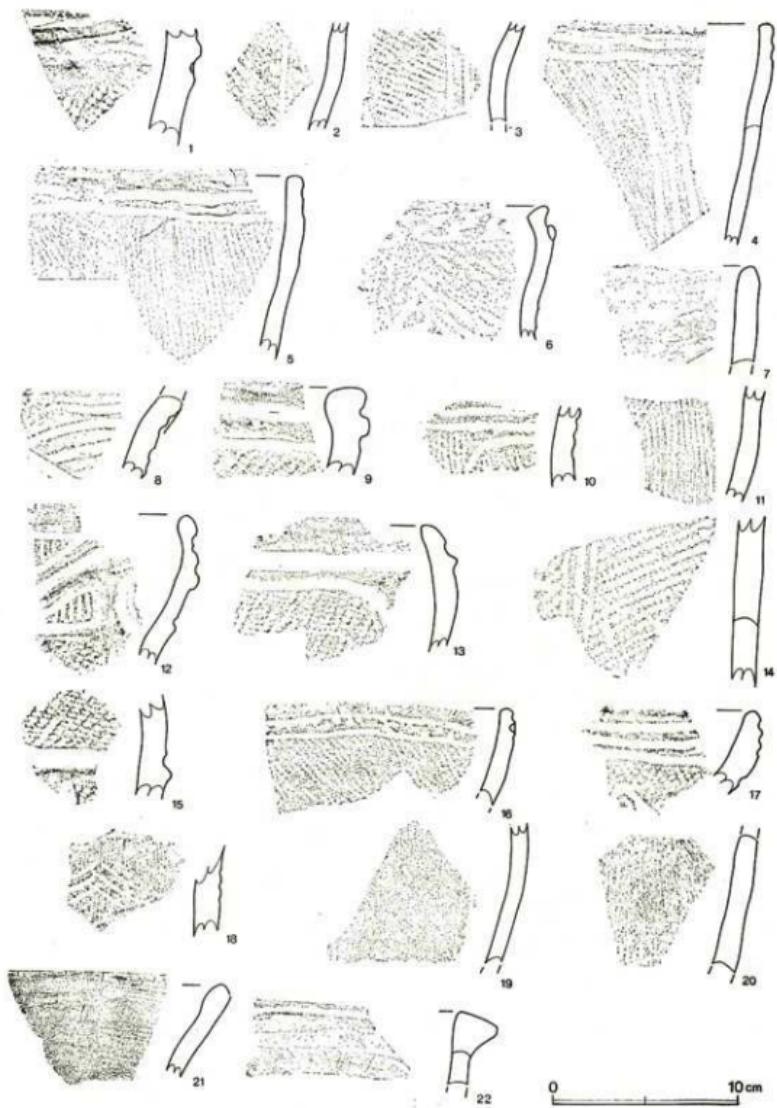
第3号住居跡出土土器（第10図12～22）

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
10-12	3	口縁が立ち気味に内凹するキャリバー形土器の口縁部破片である。口縁部文様帶は、隆起と沈線による区画文で構成されるものである。区画内は継縦に沈線が施される。胴部には沈線による懸垂文が見られる。地文には繩文R L Rが継縦に施されている。	胎土は緻密で、白色粒子が目立つ。焼成は良好である。色調は暗赤褐色を呈する。	



第9図 赤羽遺跡第1号土墳

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
10-13 + 15	3	口縁が緩く内彎し、低陸帯で区画文が構成される。陸帯下は幅広の沈線が施文される。胴部は沈線が垂下している。地文に縦文RLRが横位に施文される。	胎土は緻密で、白色粒が目立つ。焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。	
14	3	3本沈線間を磨消す懸垂文が施される。地文は縦文RLRが施文される。	胎土は緻密で、白色粒が目立つ。焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。	
16	3	口縁下に2本の沈線が巡り、沈線間は上下からの棒状の刺突で鋸歯状を呈している。地文は縦文RLRである。	胎土は緻密で、白色粒が目立つ。焼成は良好で、色調は赤褐色を呈する。	
17	3	口縁下に3本の沈線が巡り、下部に沈線で曲線文が描かれる連弧文の土器であろう。地文は縦文RLRである。	胎土は緻密で、褐色粒が目立つ。焼成は良好である。色調は黄褐色を呈する。	
18	3	3本沈線で連弧文が描かれており、地文は条線が施されている。	胎土は緻密で、小石粒が目立つ。焼成良好である。色調は橙褐色を呈する。	

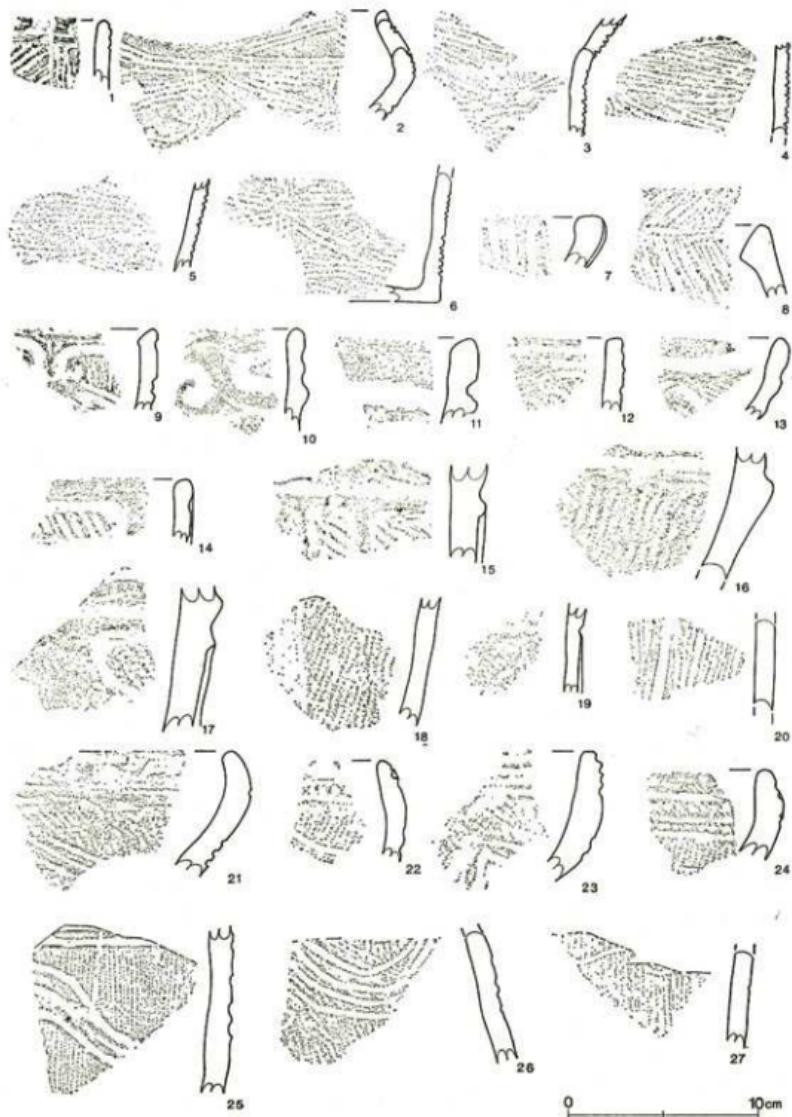


第10図 赤羽遺跡第1、2、3号住居跡出土土器拓影図

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
10-19	3	胸部に沈線による懸垂文が施文されるものである。地文は条縞である。	胎土は緻密で、白色粒が目立つ。焼成は良好であり、色調は橙褐色を呈する。	
20	3	地文に燃系Rが施文されたものである。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は橙褐色を呈する。	
21・22	3	口縁が聞く無文の浅鉢である。22は口縁が肥厚するものである。	いずれも胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。	

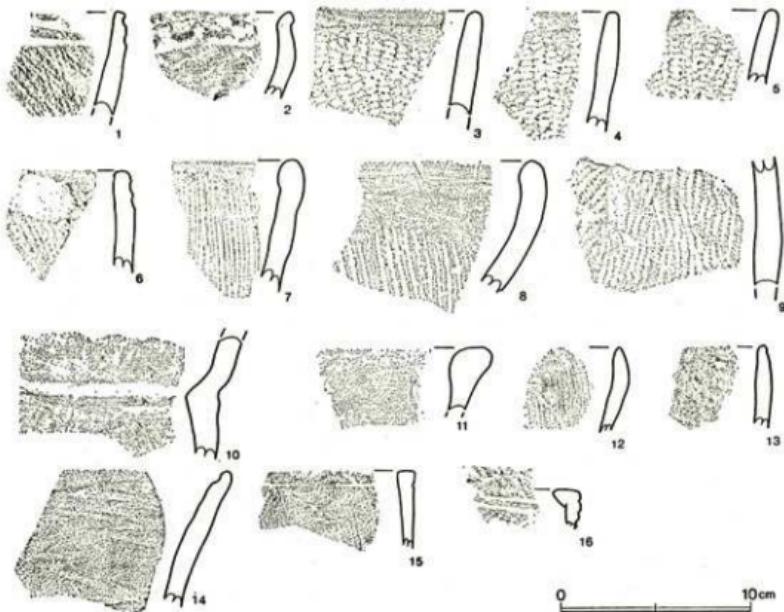
包含層出土土器（第11・12図）

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
11-1	1	口縁が聞く深鉢形土器である。竹管状工具による平行沈線が2本口唇にそって巡り同じ工具により、垂下及び斜方に行に沈線が施文される。	胎土には纖維が含まれているが表裏面はよく成形されている。焼成は良好である。色調は、表裏面が赤褐色、内部が黒色を呈する。	
2 6	2	開いた口縁はキャリバー状に内彎し、胴中部で一端括れ底部へと収束する深鉢形の器形を呈する。半截竹管を深めに圧して引いた平行沈線を3本以上を単位として使用したものであり、集合条線に近い形で施文したものである。文様は4単位。波頂部下に背合わせになって弧状文を施し、波底部に風車状渦巻文が描かれるものである。平行沈線文は胴下半から底部付近に到るまで施されている。	胎土は緻密であり、砂粒が目立つ。焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。	2～6は同一個体である。
7	3	口唇がやや肥厚している。口唇部から沈線が垂下したものである。	胎土は緻密であり、褐色粒が目立つ。焼成は良好である。色調は橙褐色を呈する。	
8	3	口頂部及び口縁に竹管状工具による沈線が斜方向に密に施文される。	胎土は緻密であり、焼成は良好である。色調は橙褐色を呈する。	
9・10 13・14	3	口縁部が緩く内彎し、低隆帯と幅広の沈線で渦巻文と区画文を作り、口縁部文様帯が構成される。10・14の区画内には斜状の集合沈線が施文される。胴部には繩文が施文される。	胎土は緻密であり、白色粒・砂粒が目立つ。焼成は良好である。色調は橙褐色を呈する。	11・14は同一個体である。
11・16 17	3	腹部とその両側の沈線により文様が構成されるものである。16は胴部に繩文RLが施文される。17は繩文LRが施文される。	胎土はいずれも緻密であり白色粒が目立つ。焼成は良好である。色調は11・16が橙褐色を呈する。17は黄褐色を呈する。	



第11図 赤羽遺跡グリッド出土土器拓影(1)

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
11-12	3	口縁下に2本の沈線が巡り、蛇行する沈線が垂下する。地文は縄文RLしが施文される。	胎土は緻密であり、白色粒が目立つ。色調は赤褐色を呈する。	
15	3	隆帯により文様が構成されるものである。地文は縄文RLである。	胎土は緻密であり、焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。	
18	3	垂下する2本の沈線間が磨消されたものである。地文に縄文RLしが施文される。	胎土は緻密であり、焼成は良好である。色調は橙褐色を呈する。	
19	3	隆帯と沈線から文様が構成される。地文は縄文LRが施文される。	胎土は緻密であり、焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。	
20	3	垂下する磨消し部の中心に沈線が施文されている。地文は竹管状工具による平行沈線が密に施文されているものである。	胎土に小石粒が目立つ。焼成は良好である。色調は黄褐色を呈する。	
21	3	口縁部が緩く内壘する器形である。口縁下に1本の沈線が巡り、間を磨消した3本沈線が弧線を描いている。地文には縄文RLしが施文される。	胎土には小石粒が目立つ。焼成は良好である。色調は暗褐色を呈する。	



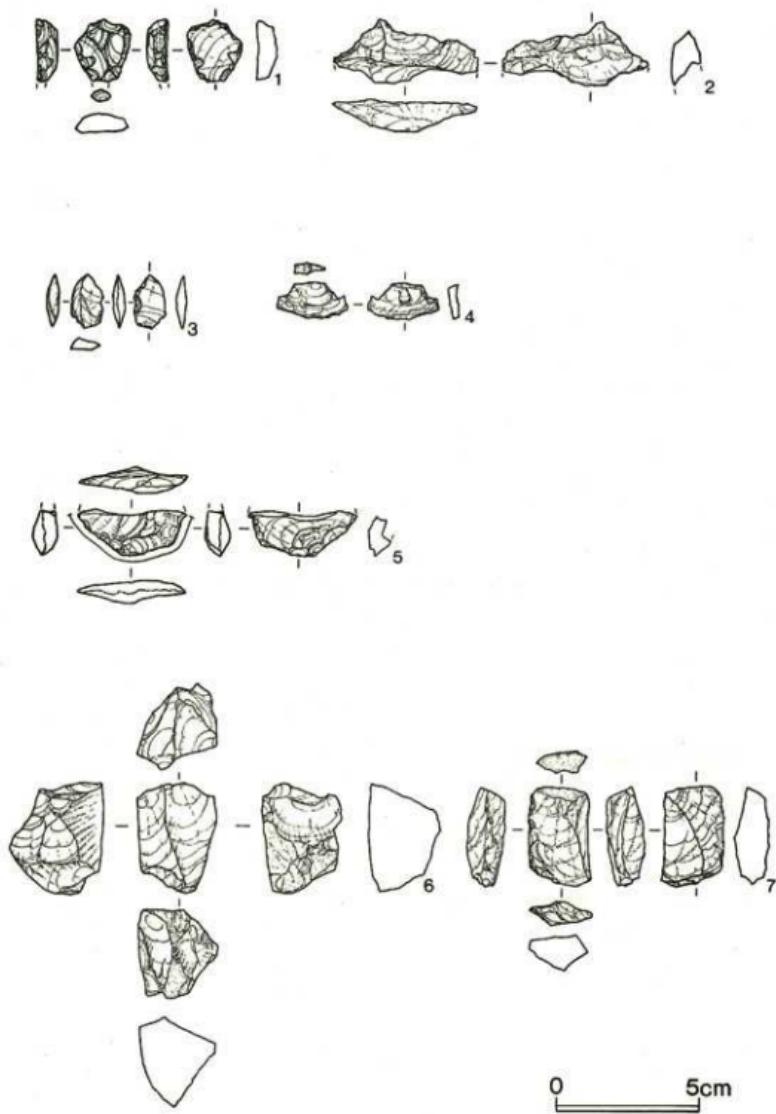
第12図 赤羽遺跡グリッド出土土器拓影図(2)

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
11—22	3	口縁下に巡る2本の沈線間に刺突が施されるものである。以下には弧線文が描かれる。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は黄褐色を呈する。	
	23	口縁下に4本の沈線が巡る。胴部は2本沈線で描かれる。地文は繩文RLである。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は黄褐色を呈する。	
	24	沈線下に巡る2本の沈線間に2列刺突が施される。刺突間にも浅い沈線が描かれる。地文はRLである。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。	
25~27	3	連弧文土器の胴部破片である。地文は25が条線、26は繩文、27は捺糸しが施文されている。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は25~27が赤褐色、26が明褐色を呈する。	
12— 1~6	3	口縁下に2本の沈線が巡る。地文には繩文RLが施文される。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。	
2	3	幅広の沈線内に蛇行する隆帯をはり付け、その上下を刺突している。	焼成は良好であるが、風化が進んでいる。色調は橙褐色である。	
3~5	3	地文は繩文が施されるものである。繩文はRLである。	胎土は緻密であり、焼成は良好である。色調は暗褐色を呈する。	3~5は同一個体である。
	7	地文に条線が施文される。	胎土は緻密で、砂粒が目立つ。焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。	
8	3	口縁部が緩く内凹し、口縁部に無文部を有し、地文に捺糸しが施文される。	胎土は緻密であり、焼成は良好である。色調は橙褐色を呈する。	
9	3	幅広の沈線が施文される。地文に繩文RLが施文される。	胎土は緻密であり、焼成は良好である。色調は橙褐色を呈する。	
10	3	土器の屈曲部に沈線が巡る。	胎土は緻密であり、焼成は良好である。色調は橙褐色を呈する。	
11	3	口縁部が開く無文の浅鉢である。口唇部が肥厚する。	胎土に小石粒が目立つ。焼成は良好である。色調は橙褐色である。	
12	3	口縁部が緩く内凹し、波状を呈する。地文は条線が施文される。	胎土に砂粒が目立つ。焼成は良好である。色調は褐色を呈する。	
13	3	風化が著しく、器面は荒れているが、口唇部に沈線が認められ、地文に繩文RLが施文されている。	胎土に砂粒が目立つ。焼成はあまり良くない。色調は褐色を呈する。	

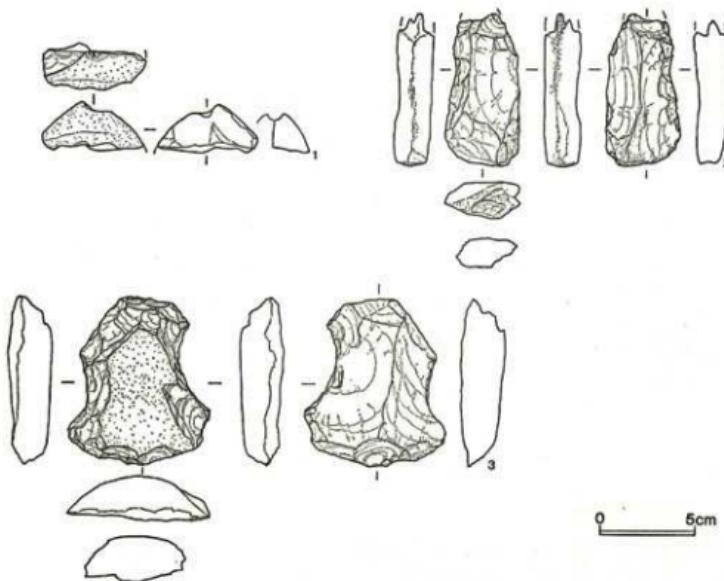
番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土・焼 成・色 調 等	備 考
12-14	4	口縁部が無文帶で、大きく開くものである。口縁部直下に沈線が巡る。地文に条線が施文される。	胎土に小石粒が目立つ。焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。	
15	4	口縁部がやや内傾する。口縁に1本の沈線が巡り、以下斜方向に集合沈線が施文される。	胎土に白色粒が目立つ。焼成は良好。色調は褐色を呈する。	
16	4	口唇部が内側に折り返っており、肥厚している。口頂部に繩文0段多条のR Lしが施文される。口縁部に2本の沈線が巡る。地文に繩文L Rが施文される。	胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は暗赤褐色を呈する。	

#### グリッド出土石器（第13・14図）

- 13-1. 石錐 B-16グリッド出土。機能部は欠損している。横長剥片を素材とし、周辺部に二次加工が施されている。裏面は平坦で断面はカマボコ状を呈する。やや白色を帯びるメノウ製である。
2. 剥片 B-16グリッド出土。横長剥片であり、下半部は欠損している。チャート製。
3. 剥離痕の認められる剥片 C-16グリッド出土。表面の右側縁基部附近及び裏面の左側縁上半部と基部に微細な剥離が施されている。石鎚の未成品かとも考えられる。チャート製。
4. 剥片 C-16グリッド出土。横長剥片。剥離面を打面としている。光沢を持ったチャート製。
5. スクレイパー C-17グリッド出土。上半部は欠損している。横長剥片を素材とし、周辺部には細かな調整剥離を施している。チャート製。
6. 石核 D-26グリッド出土。断面は不定形の三角形を呈し、一部に自然面を残置する。主に上面からの打撃によって剥片を作出したものと思われる。泥岩製。
7. 石核 B-4グリッド出土。自然面を打撃面としており、打面調整はみられない。チャート製。なお、4~7は同一母岩と思われる。
- 14-1. 凹石 B-16グリッド出土。頭頂部に凹を有する。裏面及び下端は節理面より欠損している。細粒砂岩製。
2. 打製石斧 C-11グリッド出土。ほぼ短冊形を呈し、頭部は一部欠損しているものと思われる。右側縁はやや直線的であるが、左側縁は細かな調整剥離も施され、わずかに内彎する。まっく鋭角な刃先を持つたないことからすると石斧とするには若干の疑問もある。しかし、先端部及び刃部両面には著しい磨滅痕が認められる。
3. 打製石斧 C区1号溝出土。完形品であり、分銅形を呈する。洞部及び刃部には磨滅痕が認められるが、あまり顕著なものではない。砂岩製。



第13図 赤羽遺跡グリッド出土石器(1)



第14図 赤羽遺跡グリッド出土石器(2)

第2表 赤羽遺跡石器計測表

番号	出土位置	器種	長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石質
1	B-16	石錐	(2.2)	1.9	0.7	メノウ
2	B-16	剥片	(2.3)	5.2	(1.0)	チャート
3	C-16	剥離痕の認められる剥片	1.9	1.1	0.4	チャート
4	C-16	剥片	1.3	2.5	0.3	チャート
5	C-17	スクレイパー	(1.6)	3.9	0.9	チャート
6	D-26	石核	3.9	2.9	2.6	チャート
7	B-4	石核	3.5	2.1	1.2	チャート
8	B-16	凹石	(2.6)	(5.0)	(2.0)	細粒砂岩
9	C-11	打製石斧?	(8.2)	4.0	1.8	泥岩
10	C区1号溝	打製石斧	9.0	7.7	2.4	砂岩

## (2) 古墳時代～平安時代

### 遺構

#### 第1号方形周溝墓（第15図）

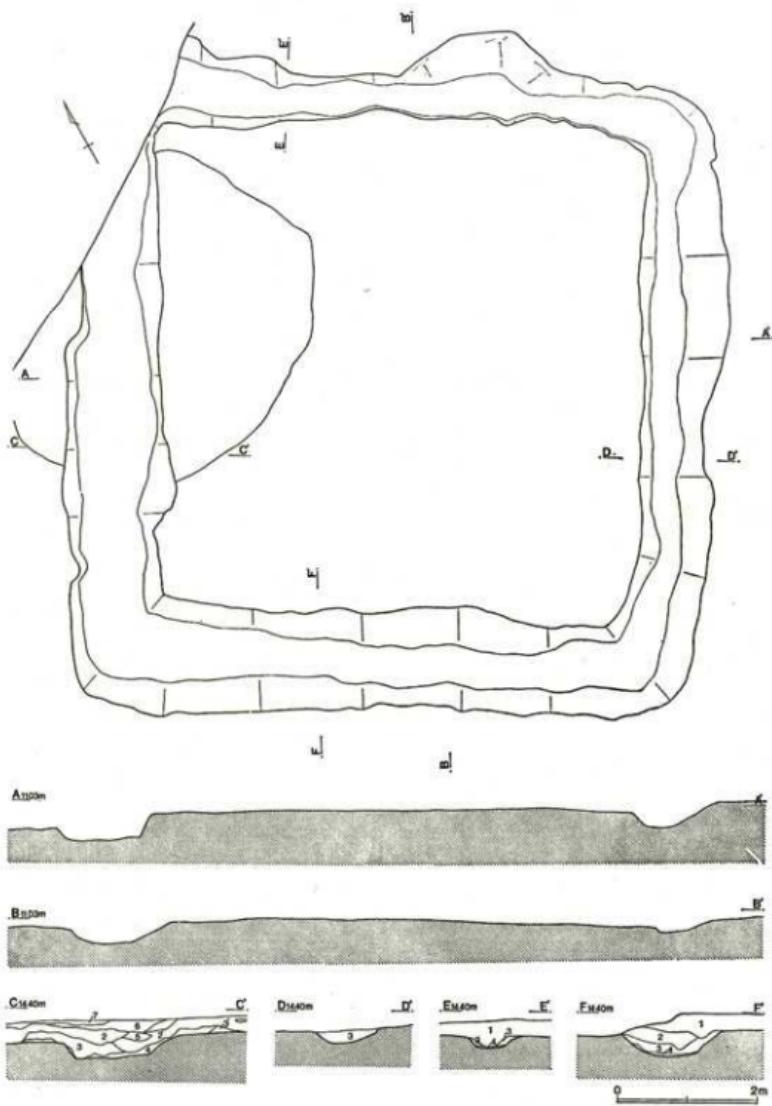
発掘区北端部に検出された。主軸方位は N-30°-E である。方台部は東西9.65m、南北9.1mを測り、周溝の幅員は最大1.65m、最小0.6mである。周溝は全周し、比較的整った方形プランを呈する。現地形変換点ぎりぎりに築造されているため、北西コーナーの外側壁は破壊されていた。周溝の掘り方には、内側が急傾斜、外側が緩傾斜という傾向がある。北溝の中央やや東寄りに突出部があるが、主体部を意識した掘り込みではない。第1号住居跡を西溝が破壊し、その土を封土としているためか、遺構確認面より上層にはかなりの量の加曾利E式土器の細片が封土や周溝覆土中に認められた。封土の高さは不明であり、主体部も検出されなかった。周溝から器厚10mm程の壺胴部片が1点出土しているが、外面荒い刷毛目、内面ヘラミガキの施されるもので、五領期であろう。

周溝の堆積土は、1. ロームブロック、スコリアを含む暗褐色土、2. スコリアを少量含む黒褐色土、2'. スコリアをごく少量含む黒色土、3. ローム粒を少量含むサラサラの暗褐色土、3'. ローム粒をやや多く含むサラサラの暗褐色土、4. 黒色土を少量含む黄褐色土、5. ロームブロック（やわらかい）、6. ロームブロック、スコリアを少量含む黒色土、7. 砂利を少量含む暗茶褐色土である。

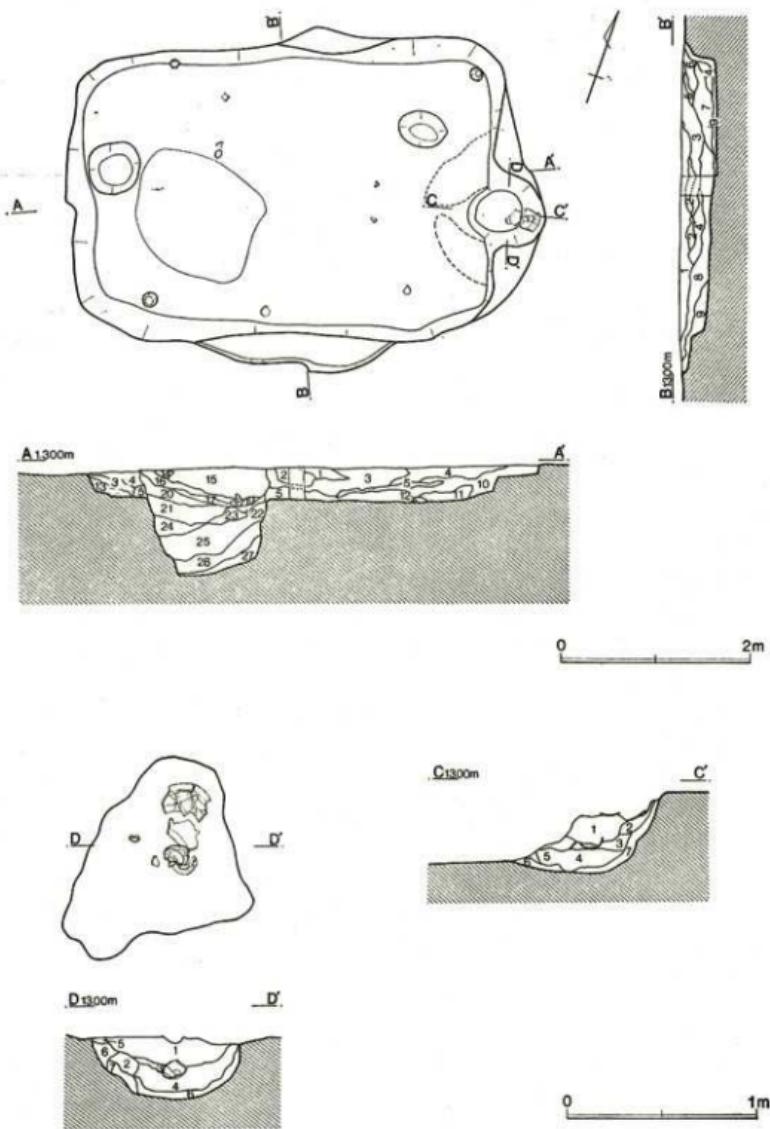
#### 第4号住居跡（第16図）

東西4.6m、南北3.2mの隅丸長方形を呈する住居跡である。主軸方位は N-71°-E で、東壁中央やや南寄りにカマドを有する。カマドの掘り方は壁の外方約60cmの長さで丸く張り出し、その周間に浅い台状の掘り込みをもつ。ソデは良好な土を使用していないため不明瞭で、基底部の輪郭線（焼土の範囲）を破線で図示できる程度であった。カマドの左脇と西壁際中央に径50cm前後の浅いビット、北東と南西のコーナーに径15cm程の小ビットが確認された。深さはそれぞれ15cm～20cm程度で、主柱穴とは考えにくいものである。住居跡の掘り込みは40cm弱あり、床面もかなりしっかりと貼床である。西壁寄りの部分に径約1.4m、床面からの深さ85cmの土壙があるが、土層観察による限りでは、後世のゴミ穴と考えられる。検出された遺物は少なく、カマドの煙道寄りに甕1、中央部付近に壺2、鉄塊1、床面中央西寄り、北壁際、南壁際に壺片各1などが出土している。

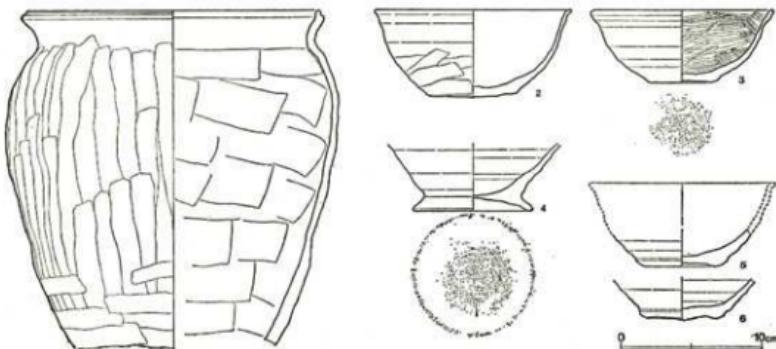
住居跡の堆積土は、1. ローム粒を少量含む暗褐色土、2. ローム粒を含む茶褐色土、3. ローム粒を少量含む暗褐色土、4. ローム粒をやや多く含む茶褐色土、5. ローム粒を多量に含む褐色土、6. ローム粒をほとんど含まない茶褐色土、7. ローム粒を少量含む暗褐色土、8. ローム粒をやや多く含む淡暗褐色土、9. 褐色土粒を多量に含む黄褐色土、10. ローム粒を多量に、焼土粒を少量含む暗褐色土、11. ローム粒を多く含み、ややかたい褐色土、12. 烧土、13. ローム粒を多量に含む茶褐色土である。以下は後世のゴミ穴の埋土である。14. 茶褐色土ブロック、15. ロームブロックを斑点状に多量に含み、硬質の暗褐色土、16. ロームブロックを多量に含む淡暗褐色土、17. ロームブロックをやや多く含む茶褐色土、18. 暗褐色土ブロック、19. 茶褐色土ブロック、20. 少量の暗褐色とロームブロックの混土、21. ロームブロックを多量に含む茶褐色土、22. 暗褐色土、23. ローム粒を少量含む淡暗褐色土、24. ローム粒をやや多く含む暗褐色土、25. 空隙の多い



第15図 赤羽遺跡第1号方形周溝墓



第16図 赤羽遺跡第4号住居跡



第17図 赤羽遺跡第4号住居跡出土土器実測図

茶褐色土、26. ローム粒を少量含む暗褐色土、27. ローム粒を多量に含む褐色土。カマド断面の土層は、1. 焼土をやや多く含む黒褐色土、2. 焼土ブロックを多量に含む暗赤褐色土、3. 焼土をやや多く含む暗赤褐色土、4. 赤褐色土(焼土)、5. 焼土を少量含む暗褐色土、6. ローム粒を多量に含む褐色土、7. かたい灰赤褐色である。またカマド図の土器出土状態の輪郭線は焼土を含む土の範囲を示す。

#### 第4号住居跡出土土器（第17図）

第4号住居跡から出土した土器のうち実測可能なものとして甕1、壺5の計6点を図示した。

甕(1)は、残存部の器高24cm、口径21.8cm、胴径24.1cmを測り、27~28cmの器高を想定できる。口唇部は外に面を有し、ゆるい沈線が一周。やや内面に肥厚し、丸く仕上げられる。口縁部はゆるく外反し、頸部は「く」の字にくびれ、胸部上半で若干張り出し、底部を欠く。器内はやや厚い。胴部外面縦位ヘラケズリ、下端部横位ヘラケズリ、内面横位ヘラナデ、口縁部内外面左回転コナデ。胎土細。細粒砂やや多く含む。淡橙褐色。焼成良好で堅い。65%残存。

壺は無高台で丸い体部を有するもの(2~4)と高台をもつ直線的な立ち上がりのもの(5・6)とがある。2は、口径14.2cm、底径6.5cm、器高6.2cmを測る。口唇部は小さく外反し、丸い仕上げである。体部は内湾して立ち、わずかに突出する丸底風平底の底部を有する。底部との境は明瞭である。器内は底部で厚いが、体部から口縁部にかけては薄い。口縁部右回転ロクロナデ、体部外面はヘラケズリ後ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、体・底部内面はロクロナデ後、研磨される。胎土細。細粒砂多量。橙褐色。焼成良。ほぼ完形。3は、口径13.2cm、底径4.3cm、器高5.2cmを測る。口縁部はゆるく外反し、口唇部は外に肥厚気味で丸い。体部は内湾し、底部との境でゆるく屈曲する。底部は上げ底風平底である。口縁部右回転ロクロナデ、体部外面ヘラケズリ後ロクロナデ、内面は横位の強いヘラミガキで、鋭い稜線が目立つ。底部は回転糸切り離し未調整である。胎土細。細粒砂と小石多く含む。淡橙褐色で、内面やや黒ずむ。焼成良。ほぼ完形。4は底径5.5cmを測る。体部内湾して立ち上がり、小さな段をもって上げ底風底部に移行。体部外面左回転ロクロナデ、内面よく研磨。底部糸切り離し後ヘラナデ。胎土細。細粒砂多量。淡褐色。焼成良。底部

のみ遺存。5は高台部径8.6cm、底径7.0cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、上部底風底部を呈する。体部下半は器内厚く、底部中央はごく薄い。高台は貼付高台で、大きく「ハ」の字形に開き、端部は丸い。体部内外面右回転ロクロナデ、高台部は逆位でロクロナデ、底部回転糸切り離しである。胎土細。細粒砂多量。淡褐色。焼成良。6は高台部が剥落し、底径6.0cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、小さな段をもって突出気味の底部に移行。底部は厚い。体・底部右回転ロクロナデ。胎土細。細粒砂やや多。淡橙褐色。焼成良。全体の10%残存。

### (3) 中・近世

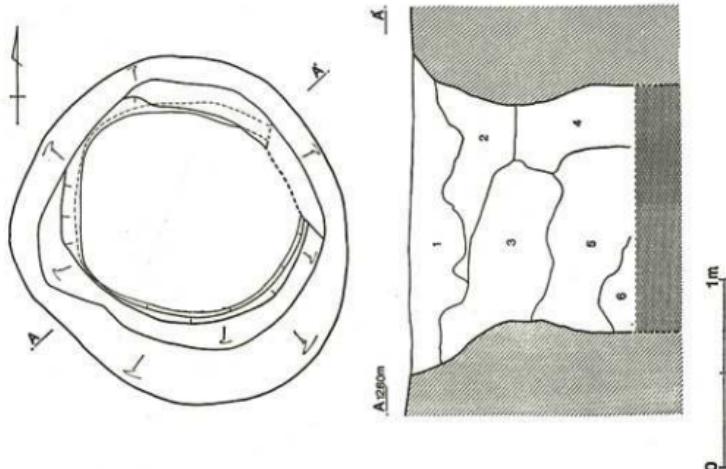
#### 遺構

##### 第1号井戸跡（第18図）

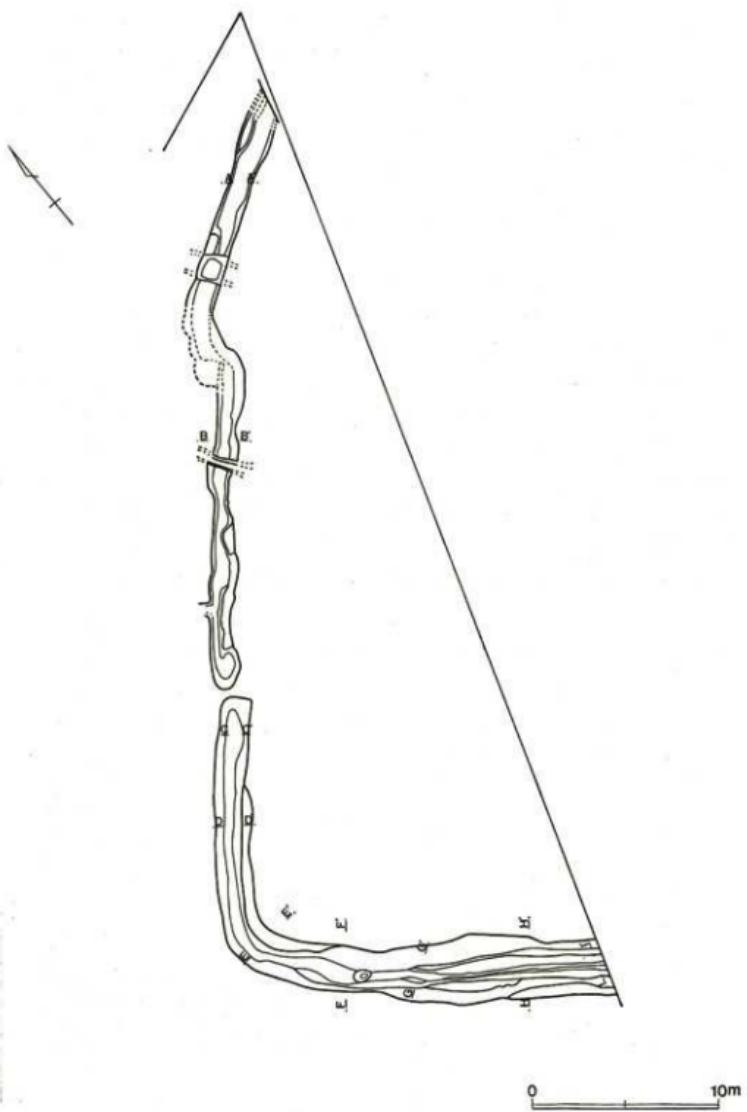
発掘区中央部の浅い谷に面して検出された。確認面の掘り込みの大きさは、長径1.9m、短径1.1mで、椭円形であるが、肩を持ち、円形と隅丸方形の中間形態の断面形を呈して垂直に掘り抜かれている。井戸枠は確認されていない。所謂素掘り井戸である。1.5mをはるかに越える深さを有するが、調査期間の関係で完掘できなかったため深さは不明とせざるをえない。出土遺物は皆無であり、時期を限定できないが、周囲の確認面上から江戸後期ないしそれ以後と考えられる瓦片や陶器片が出土しているため、江戸後期以降と考えてよいと思われる。第1号井戸跡の堆積土は、1. 炭化物を少量含む暗褐色土、2. 炭化物を含む褐色砂質土、3. しまりのよい暗褐色土、4. しまりの悪い暗褐色土、5. ローム粒を少量含む褐色土、6. ローム粒を多量に含む褐色土である。

##### 第1号溝跡（第19・20図）

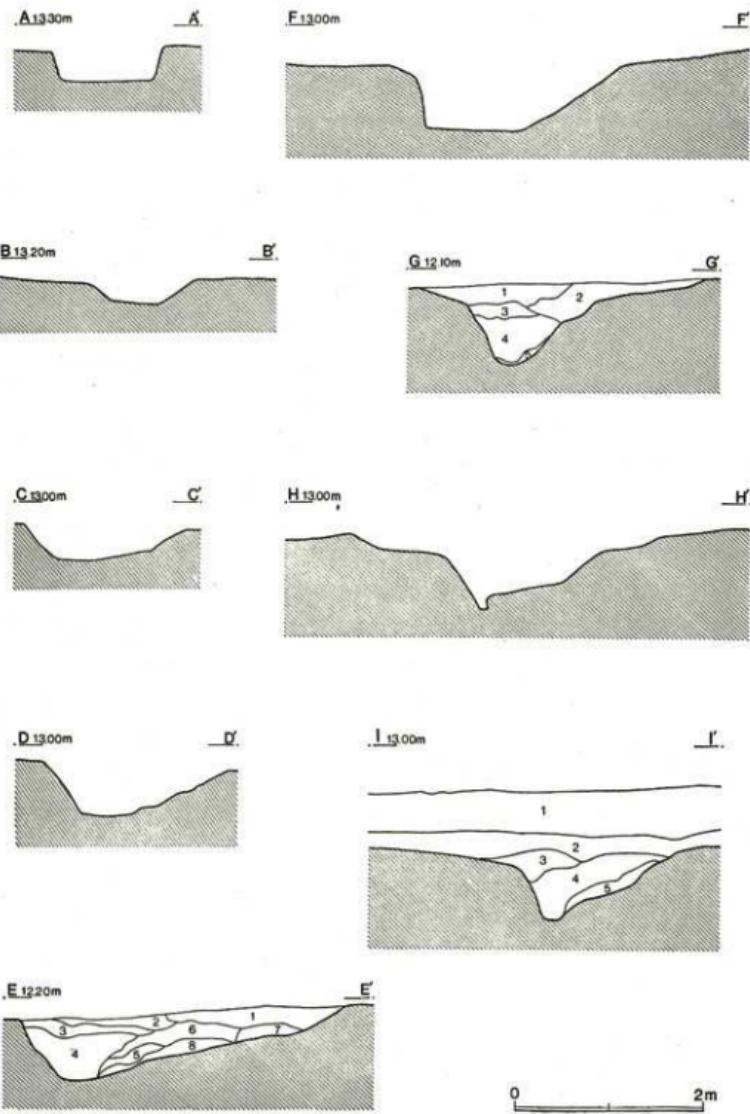
発掘区南端で遺跡の南限にあたる台地斜面からその上の平坦面上（C区）に検出された。地形変



第18図 赤羽遺跡第1号井戸



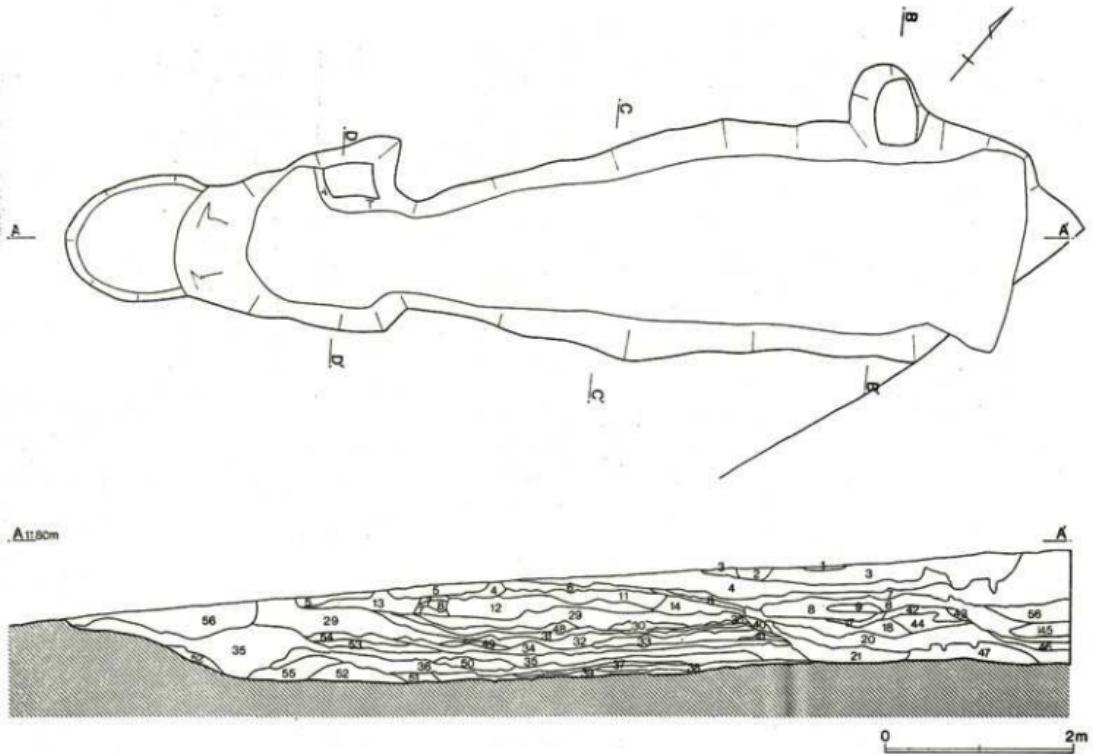
第19図 赤羽遺跡第1号溝(1)

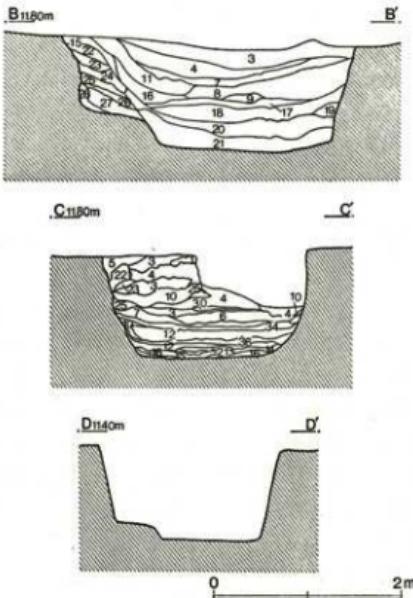


第20図 赤羽遺跡第1号溝(2)

第21図 油羽道路第1号断面図(1)

— 34 —





第22図 赤羽遺跡第1号炭焼窯(2)

換点で、直角に屈曲して東に走る「L」字形の溝と南北方向の溝からなるもので、明確なブリッジが一箇所ある。ただし最も北側の部分は方向がやや東に振れ、長さ4mの擾乱部をもつため、あるいはこの北寄りの部分にもブリッジをもつかもしれない。検出された部分の長さは、68m（東西20m、南北48m）ある。南北溝は、断面逆台形の溝で、掘り方はあまり落ち着かない荒掘りの溝である。「L」字形の溝は、肩をもつ断面を呈する所謂箱葉研堀であり、幅も広い。南北溝は幅0.8m～1.7mで、安定した掘り込みの部分では1.2～1.5m程、深さは25～40cmである。「L」字形の溝は南北走行部が幅1.6～2.0m、深さ40～65cm、東西走行部が幅2.3～3.8m、深さ70～87cmである。遺物は、「L」字形溝の屈曲部、東西走行部の最大幅部分にまとまって出土した。陶器片と瓦片がほとんどである。第1号溝跡の堆積土は、1. ローム粒をやや多く含む淡褐色土（表土）、2. ローム粒を少量含む褐色土、3. ロームブロックを多量に含む褐色土、4. ローム粒を少量含む暗褐色土、5. 褐色土粒を多量に含む黄褐色土、6. ロームブロックを少量含む暗褐色土、7. ロームブロックを多量に含む茶褐色土、8. ロームブロックである。

#### 第1号炭焼窯跡（第21・22図）

第1号溝跡の南に隣接して検出された。緩斜面の傾斜方向に沿って主軸方向をとり、N-49°-Eである。主軸方向上の長さは約10.5mであるが、先端部は東方向に延びるもう一つの窯体に破壊されていて、正確には計測できない。幅は最大2.7m、最小1.15m、焚口最大幅2.15mである。窯体

は焚口から先端部に向かって幅広くなる窓蒸状の形態である。焚口は鍵状に屈曲して広がり、逆三角形状になり、その先に丸い浅い掘り込みがある。窓体先端部から1.5mの位置の窓体西壁に幅8cm程の窓道がとりつき、外側に60cm程突出する。窓底ベースは平坦であるが、1mにつき5cm程度の勾配がある。焚口部は掘り込みが急傾斜をもつが、階段状におりられるようになっていたと思われる。確認面から窓底までは、深さ1.05~1.25mである。炭層は、大きく4層確認でき、半分程埋まっている状態になども、上屋をカサ上げして操業していたことが予想できる。

第1号炭焼窓跡の堆積土は、1・5・6・8・9・32・41・43・44・56がロームブロック・褐色土をやや多く含む黄褐色土（再堆積ローム土）、2・12・13・18がローム粒・焼土粒・炭化物を少量含む褐色土、3・15・16・17・19・23・25・27・31・34・36・39・45が炭層（黒色・灰黑色・黒褐色）、4・21・35が焼土・炭化物を多量に含む暗褐色土、7・33がロームブロック・焼土粒・炭化物をやや多く含む灰褐色土（天井崩落土）、10・30・37・46・48・51・54が焼土層（赤褐色・赤灰色）、11・20・29・38・42・49・53がロームブロック・炭化物・焼土粒を少量含む暗褐色土、14がローム粒・焼土粒・炭化物を少量含むしまりの悪い淡褐色土、15・22・24・26・40がロームブロック・焼土粒・炭化物を少量含む暗茶褐色土、16がやや大きな炭化物を含む暗褐色土、28・47・52が黄褐色土（ソフトローム）、55が炭化物・焼土を少量、ローム粒を多量に含む茶褐色土である。

出土遺物は陶器片・カワラケ片が数点出土したにすぎず、図示できるものはない。

#### 中・近世の出土遺物（第23~25図）

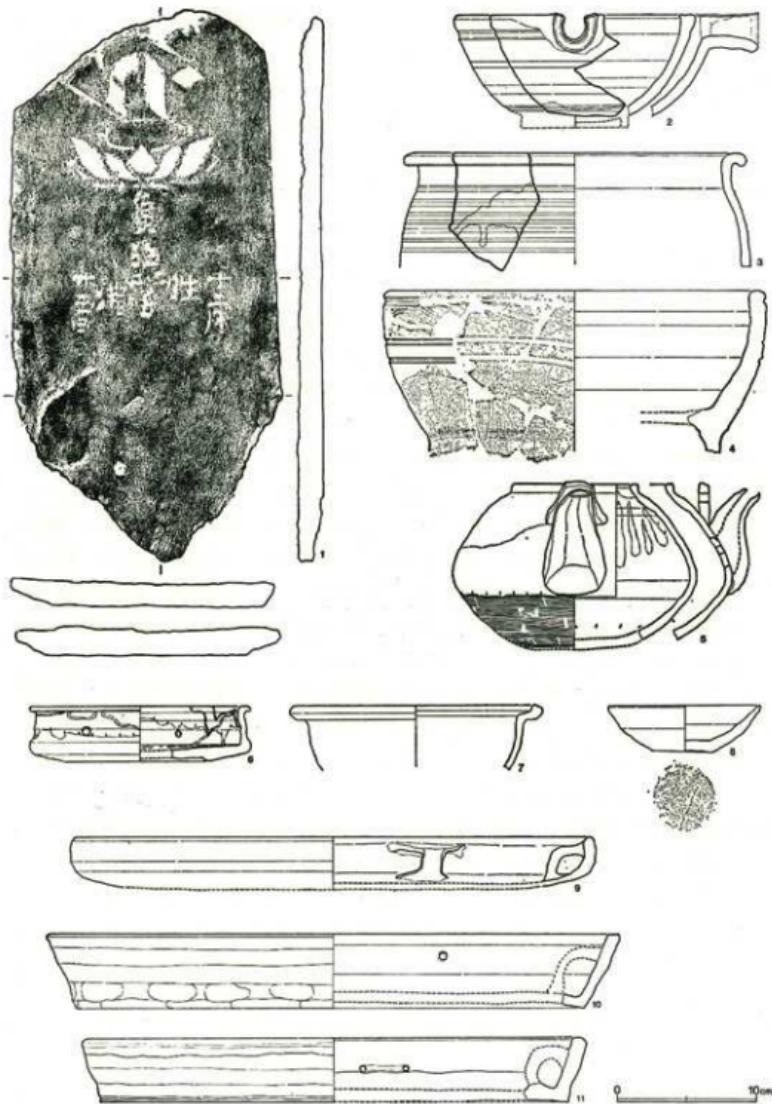
赤羽遺跡出土の中・近世の出土遺物は、大半はC地区の遺構確認作業中にグリッド・表土から取り上げ、一部は第1号溝跡の「L」字溝部コーナーと東西溝部の東寄りでまとまって出土した。ただし、板碑（第23図1）はA地区B-21グリッドから、古鏡2点（第25図1・2）はそれぞれA-18グリッド、B-27グリッドから、須恵系坏形土器（第23図8）はB-29グリッド出土である。

板碑は上下とも折損していて、大きさや全形が不明確であるが、残存部長39.8cm、最大幅19.4cm石の厚み1.5cm~2.2cmであり、縁泥片岩使用である。一尊種子でキリーク（阿弥陀）であろうと思われる。下に銘文があり、下記のように判読できる。貞治4年は南北朝期の西暦1365年にあたる。

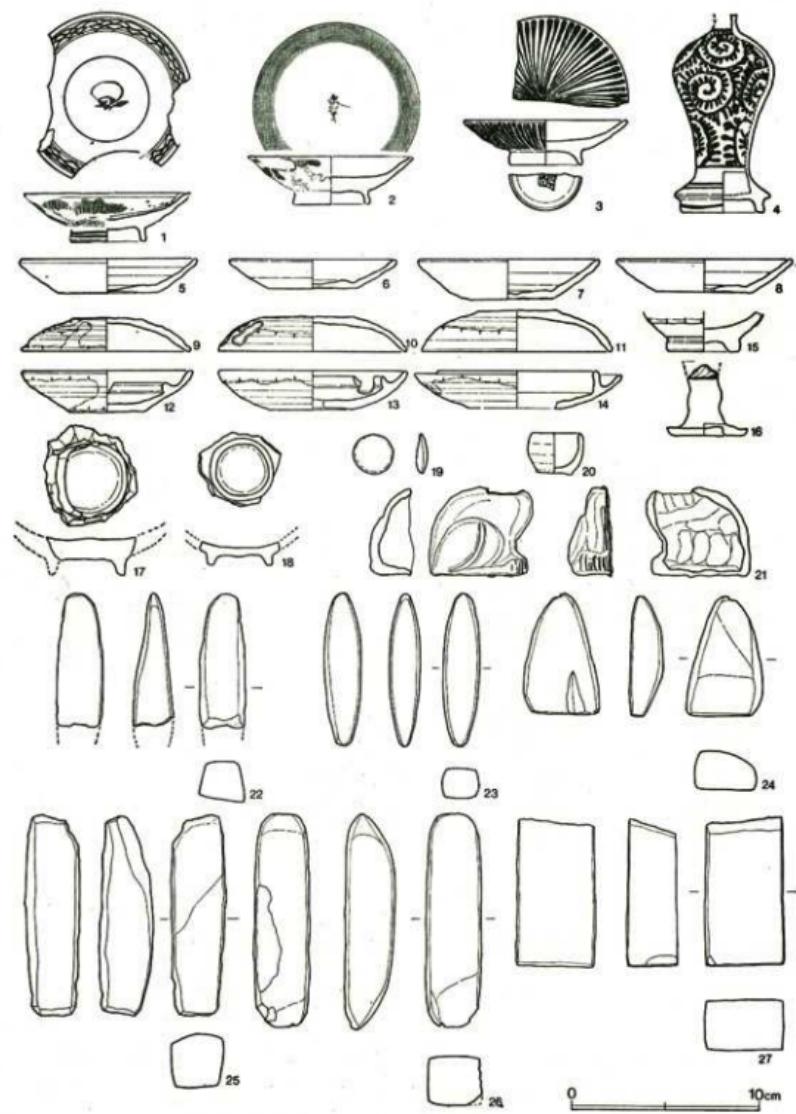
十|一四  
出(出々々)  
此(此々々)  
中田田  
(中田田)

陶器類は鉢・甕・片口・土瓶・灯明皿・茶碗・皿・小皿等がある。片口（第23図2）は口径17.5cm、注口部の長さ3.6cm、外径3.2cm、内径1.8cmを測る。全体は半球形を呈し、口縁部直下に幅広の凹線、胴部中位に2条の沈線、口唇部にもゆるい凹線をもつ。注口部は半円筒形で、先端に向かってやや広がる。先端部は丸いがやや細る。ロクロ整形だが、注口部は指撫ですか？ 注口部の天井端面はよく削られている。内面全体と外面の底部付近まで黄緑褐色の釉がかかる。残存率10%。第1号溝跡出土。甕は図示したもの（第23図3）は中型のもので、復原口径は25.6cm、胴径25.6cmを

測る。口縁部は大きく外反し、口唇部は下向きに寝て丸い。頸部と胸部の境に1対、胸部に7対の沈線をもつ。ロクロナデ整形で一部工具使用らしい。チコ色の釉が内外面にかかるが、さらに黒褐色の釉が流しきかけられる。全体の5%にも満たない小片である。B地区とC地区の中間区の確認面出土。鉢(7)も同地区から出土した。口縁部は体部から外に折れ、内湾して立ち、口唇部は分厚いがとがり気味である。体部は丸く、下半部を欠く。推定口径18.4cmである。チコ色の釉を厚くかけられる。素焼きの高台付鉢(4)もある。器肉は厚い。丸い体部をもち、台部・底部は不明だが、平底で高い高台を想定できる。口唇部は面をもち、口縁部に1本、体部中位に2本幅広の沈線がある。口縁部外面に櫛状波状文、体部外面に柳目状整形痕をもつ。右回転ロクロナデ整形。灰褐色。焼成良好。口径27.8cm、残存部高11.75cm。胎土細。細粒砂やや多。残存率10%。C地区表土出土。土瓶(5)は注口部を中心に30%程度遺存している。口径9.1cm、胴部最大径17.8cmを測る。口縁部はゆるく外へ曲げられ、外面直立する形態に削り整えられる。胴部は大きく張り出し、算盤玉形を呈する。注口は胴部中位からやや上にとりつき、急角度で立ち、外反する。先端部径1.3cmである。注口部と胴部の間に板状の釣手接続部がある。最大幅4.5cm、高さ3cmで、直立して胴部にとりつき径6mmの孔をもつ。第1号溝跡出土。皿は深い皿(第23図6)と染付の小皿(第24図1~3)がある。6は口径16.1cm、器高4cmを測るやや大きなものである。口唇部は強く外反して寝る。体部は直立気味に立ち、底部との境で丸くつき出す。底部は外縁部が傾斜面をなし、段をもって上げ底となる。底面はロクロ右回転ヘラケズリ、それ以外はロクロナデ整形である。濃褐色の釉がかけられる。胎土緻密。細粒砂・小石等やや多。灰褐色。焼成良好。残存率25%。第1号溝跡出土。染付小皿は、それぞれ(1)口径9.0cm、器高2.6cm、(2)口径9.0cm、器高2.6cm、(3)口径8.9cm、器高2.4cmを測る。比較的規格的であり、ゆるく内湾気味に立ち、わずかに開き気味に高台が取りつく特徴も共通する。1は、大木と灌木、山と雁の群れを組み合わせた絵を外面に、内面は中央に花弁を图案化し、周縁は外一重、内二重の園線で囲まれた二重円弧の重ね合わせ文が描かれる。2は外面にキュウリ等のつると実が描写され、内面は中央に判読できない文字が配され、周縁は幅1.3cmの淡紺色に染められる。3は内外面ともに正放射状線で周縁部に行くほど太る線が描かれ、底面にも象形文字風の模様が書かれる。3点とも淡紺・濃紺の2色で構成される。1・2は70%残存、3は30%残存である。第1号溝跡付近から出土。これらと共にもう1点神仏具様の器がある(第24図4)。器高10.6cm、体部最大幅5.4cmを測る。体部上位でふくらみ、体部下端の突出部まで内湾する。台部は開き気味に直立する。口縁部は径1.2cm程で小さく直立する。濃紺色でつるの具象文が描かれ、その上下端と体部下端・台部に淡青色の条がある。口縁部先端を欠き、90%以上残存。灯明皿は小破片まで含めると數多いが、蓋3・身3を図示した。灰褐色の地にチコ色の釉をかけている。法量は、蓋が(9)口径9.2cm、器高1.8cm、(10)口径10.15cm、器高1.9cm、(11)口径10.2cm、器高2.2cm、身が(12)口径9.3cm、底径4.1cm、器高2.25cm、(13)口径10.25cm、底径4.3cm、器高2.1cm、(14)口径11.2cm、底径5.05cm、器高2.0cmを測る。蓋は端部のつまみ出し具合を除けばほぼ同形で、平らな天井部とゆるく内湾する体部をもつ。天井部外面と体部外面はロクロ右回転ヘラケズリ、口縁部外面と内面ロクロナデ整形。身は内湾する体部と平底の底部からなり、口唇部は丸い。内面の突起部の形態は異なる。12は低く丸い断面で、直線的に切



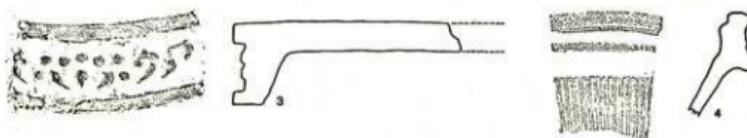
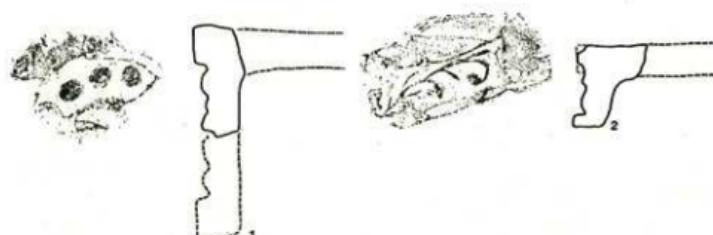
第23図 赤羽遺跡グリッド出土の中・近世遺物(1)



第24図 赤羽遺跡グリッド出土の中・近世遺物(2)



0 5cm



0 10cm

第25図 赤羽遺跡グリッド出土の古銭・瓦・壺り鉢拓影図

り込みが入る。13はとがり気味に立ち、切り込みは直線的だが、丸く幅広い。14は長く直立し、口縁部より上まわる。端部は丸い。右回転ロクロナデで整形され、底面・体部下半は逆位で回転ヘラケズリ。残存率は9・12・14が25%、11・13が35%、10が60%である。13・14は第1号溝跡から、9・10・12は溝跡周辺の表土から、11はB地区とC地区の中間区の表土から出土した。天目茶碗も1点ある。底部のみで、全体の20%程度残存。回転ヘラケズリでよく調整され、黒褐色の釉が内面と体部外面の下半部の途中まで厚くかかる。灰褐色の地で焼成良好。底径3.9cm。B・C地区中間

区出土。土師質皿は第1号溝跡からまとめて出土した。5は口径9.6cm、器高1.9cm、6は口径9.1cm、器高1.6cm、7は口径9.8cm、器高2.2cm、8は口径9.5cm、器高1.8cmを測る。左回転ロクロナデ整形。底部回転糸切り離し未調整。底部は上げ底風平底で、体部は直線的に立ち上がり、口唇部は若干つまみ出で丸い。胎土細。細粒砂多量。淡橙褐色。焼成良好。5は85%、7は90%、8は35%、6は100%の残存率である。内耳土器は3点ある。11は口径36.6cm、底径34.2cm、器高4.6cm、10は口径41.8cm、底径37.0cm、器高5.4cm、9は口径38.4cm、器高3.8cmに復原できる。10・11は上げ底風で直線的に立ち上がる。9は丸底風で体部も内湾気味に立ち、内耳部分は断面橢円形で幅広である。右回転ロクロナデと回転ヘラケズリで整形される。10の体部下半には指頭圧痕残る。9・11は橙褐色、10は灰褐色で、焼成良好。10は第1号溝跡、9は溝跡周辺部、11はB・C地区中間区表土からそれぞれ出土した。B-29グリッド出土の須恵系环形土器は、口径11.1cm、器高3.3cmを測る小振りのもので、器肉は厚い。上げ底風平底の底部で、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部つまみ出し気味で口唇部とがる。体部・口縁部右回転ロクロナデ、底部は回転糸切り離し未調整。胎土細。細粒砂多量。淡褐色。内面に煤付着。焼成良好。90%以上残存。第24図21は猫等の動物を型とり、外面ヘラケズリ後ナデ、内面ユビオサエで整形。橙褐色。焼成良好。第24図17・18は茶椀か小皿の底部を意図的に打ち欠いたもので、透明の釉がかかる。18は気泡の抜けたような表面である。第24図16は仏花器の脚部かと思われ、一部紺色に染付られ、透明の釉がかかる。裾が大きく広がる。第24図19は泥面子である。無文の小型品で、指撫で整形。橙褐色で焼成良。20は小さな坏で、ロクロ整形。底部糸切り離し未調整。口形2.5cm、器高2.2cm。橙褐色。焼成良。以上の特殊遺物はすべて第1号溝跡出土。砾石は6点ある（第24図）。27は側面に櫛状工具による擦痕が顯著で現代のものであろう。それ以外はすべて四面ともよく使われていて、22・23はほぼ鉗錐状に残る。23・24・25・26は完形品である。石材は緑灰色乃至灰褐色の砂岩か凝灰質砂岩を使用しているようである。24・25・26は第1号溝跡出土。22・23・27はB・C地区中間区出土。拓影図は、軒丸瓦・軒平瓦の瓦当面3点と、擂鉢3点、古銭6点を図示した。軒丸瓦は連珠文を周縁に配した巴文で、三ツ巴かと思われる。瓦当面の1/4程しか残存しない。丸瓦部との接合面は櫛齒状工具の刻目痕が明瞭に残る。2・3は均正唐草文の軒平瓦である。3は瓦当面の1/4、2は1/4程が残存する。3の中央は連珠文と流線形文で花卉と葉を図案化し、周囲の茎・葉の表現も単純である。2は右端の部分しか残存しないが、茎・葉の反りかえりの表現は整っている。黒灰色の色調で、きれいに瓦質に焼け、表面の研磨も入念だが、あまり重量感がない。3は第1号溝跡、1・2は溝跡周辺の出土である。4～6は目の荒い擂鉢である。4は口縁部、5は口縁部直下、6は体部下端の部位である。9本1单位幅3cmの櫛齒状工具使用だが、4・5と6は工具が異なる。4・5は赤褐色の地に暗赤褐色の釉、6は灰白色の地にチコ色の釉がかかる。4の口縁部は内外に浅い沈線を伴なう段をもち、口唇部と口縁部外面は面をもつ。4・5は第1号溝跡、6はその周辺出土。古銭（第26図）は6点で、いずれも寛永通宝である。怪が大きく字も太く大きいもの（2・6）と怪が小さく字も小振りのもの（1・3・4・5）に分けられるが、1・3と5はやや字形が異なる。3・4・6はB・C地区中間区、5は第1号溝跡出土である。

## 4. まとめ

本遺跡で検出された縄文時代の遺構は住居跡3軒、土壙1基である。いずれの住居跡も遺物の出土量は少ないが、加曾利EⅡ式期の住居跡であろう。

本遺跡で検出された方形周溝墓は発掘区の路線幅が僅か23.75mしかないので単独で築造されたのか、群をなすのか不明とせざるをえない。小室支台上の遺跡では、現在のところ方形周溝墓の検出例が乏しく、支台北端の向原遺跡（1981年埼玉県埋蔵文化財調査事業団により調査）に2基が確認されているにすぎず、古墳の築造も認められないので、周囲の各支台と異なり、共同体首長の成長の度合が弱く、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺跡（群）の分布上からもむしろ他の支台の集團による影響が予想される。前述の向原遺跡においては、吉ヶ谷式土器を出土しているのに対し、本遺跡西北方の小室天神前遺跡（田中・玉田・加藤 1981）では典型的な前野町式土器が出土している。また、一つ東の岩槻支台にある馬込新屋敷遺跡・さら遺跡（鈴木・藤原 1983）・馬込七番第1遺跡（野中 1982）や南の片柳支台根元部にある尾山台遺跡（塩野他 1981）等では、口縁部に輪積み痕の残る台付甕のように下総地域の影響を受けた土器が出土する。このように、若干時間差の問題はあるが、個性の強い土器の分布がかなり狭い地域で偏っている状況は比企・入間地方における弥生中期後半から後期にかけての櫛描文系・南関東系・吉ヶ谷式土器の分布状況（柿沼 1982）にやや類似しているように見える。以上のように、集團の動向の不安定を思わせる土器の様相が、集團墓や首長墓の未成熟を傍証するのではなかろうか。

平安期の第4号住居跡は出土土器量が少なく、明確な時期を推定するのには今ひとつ不安が残る。甕は「コ」の字状口縁を呈する国分寺特有の甕ではなく、厚手で焼きのよいシャープなヘラケズリを施したものである。坏はロクロ整形の須恵系土器で、高台付のものと無高台のものとがあるが、仕上がりや焼きはあまり変わらない。法量の上では、口径>底径×2であって、器高もかなり高い。これら的一群を谷を隔てて本遺跡と対応する大山遺跡の編年観（中島他 1979、金子他 1982）に沿って考えてみたい。甕の口唇部に面を持ち、さらに内外面に沈線を持つなどの特徴は、大山遺跡では、A区42号住、46号住、56号住、57号住等の出土土器に散見される。また、器高が高く、口径/底径比が1:2以下になるものは、A区51号住、56号住、B区5号住等の出土土器に見受けられる。甕の場合は9世紀後半段階から見られる器形であるが、本遺跡の甕は、口縁部が短かく、頸部も屈曲形態から湾曲に変わっているなど、作りの退化が著しい。A・B区隣接区10号住よりも後出的であり、坏の焼成や成形の変質から考えても、10世紀第2～3四半期とすべきであろう。

### 参考文献

- 柿沼幹夫 1982 「吉ヶ谷式土器について」『土曜考古』第5号 土曜考古学研究会  
金子直行他 1982 『大山』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第17集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
塩野 博他 1981 『関東地方における古墳発生期の諸問題』 日本考古学協会大会報告要旨  
鈴木敏昭・藤原高志 1983 『さら・帆立・馬込新屋敷・馬込大原』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書  
第24集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
田中信・玉田浩一・加藤光 1981 『小室天神前遺跡』 伊奈町小室天神前遺跡調査会  
中島利治他 1979 『大山』 埼玉県遺跡発掘調査報告第23集 埼玉県教育委員会  
野中松夫 1982 『馬込七番第1・2遺跡』 蓼田市文化財調査報告第5集 蓼田市教育委員会

## IV 伊奈氏屋敷跡

### 1. 遺跡の概観

伊奈氏屋敷跡は、県指定「伊奈氏屋敷跡」の一部が東北・上越新幹線建設にかかるため調査が行なわれたものである。調査場所により、裏門跡（I-4 東区）、土塁（I-5 東区）、屋敷対面の台地部、低湿地と 4ヶ所に分けた。遺構確認作業は、I-4 東区・I-5 東区は住宅・雜木であるため表土を重機で排除し、台地部は人力で行なった。底湿地は屋敷跡に関連した遺構を検出すべく屋敷のある台地に直交して 5ヶ所、ウェルポイントにて強制排水した区画を設定し、遺構の検出に努めた。そして調査を進めていく中で、縄文時代の丸木舟・土器片が検出され、縄文時代の低湿地遺跡であるということで、急拠調査が拡大して行なわれることになり、新たに 4ヶ所区画を設定した。台地部は  $10 \times 10\text{m}$  の大グリッドを設定し、併せて標高を求めて基準杭とした。グリッドは北から南へ 1～8。東から西へ A～D に分割し、各大グリッドを 1-A、1-B 区と呼称した。調査はそれぞれ大グリッドの内部に、1辺 2m の小グリッドを設定し行った。

底湿地は、始めに設定した区を I-1、I-2 …… 区と呼称し、2回目に設定した区を II-1、II-2 …… 区と呼称した。各区は階段掘りにし、最下部を中心に各区若干の差はあるものの  $4 \times 4\text{m}$  の大グリッドを設定した。グリッドは東から西へ 1～4、南から北へ A～L に分割した。各大グリッドの内部は 4分割し、1A-4、2B-1 …… 区と呼称した。

調査の結果、台地部からは先土器時代の遺物が、台地の縁辺より 2ヶ所、ナイフ形石器・礫などが集中するところが認められた。低湿地からは縄文時代の土器・石器・木製品が検出された。

縄文時代の遺物は縄文後・晚期の土器片と丸木舟 3、漆塗り飾弓 1、白木弓 3、漆塗り櫛 1、樅状木製品などが出土地した。低湿地のマコモ層、粘土層の下に植物遺存体を多く含む粘土層及び砂層がありこの中から遺物が検出された。土器は縄文後期加曾利 B 式期から縄文晚期安行 3a 式期にかけてが多く出土し、木製品もほぼ同一時期の所産と考えられるものである。丸木舟は、I-1・2 区からほぼ完全に、I-4 区から破片が出土した。漆塗り飾弓は I-5 区から出土している。弦を引いた時の強度を増すために外側には溝が彫ってあり、一定間隔に樹皮様のものを巻きつけ、上から赤漆を塗っている。

江戸時代の遺構は、伊奈氏屋敷跡に関連するもので、I-5 東区から館跡にみられる畠掘が検出された。掘の上には粘土と砂を反覆した、土塁が確認できた。I-4 東区の調査は浮島状の屋敷と台地を結ぶ細い鞍部を中心に行ない、横断する溝の確認ができた。遺物は出土しなかった。屋敷と直接関連するか不明であるが、I-3 区より大規模な埋め立て跡が検出できた。埋め立ての縁辺部には杭を打ち、竹の束を敷いてマコモ層の上を埋め立てていた。

なお本調査ではウェルポイントを利用した低湿地の調査が有効であると確認できた意義は大きく、今後の調査が期待されよう。

## 2. 発掘調査の経過

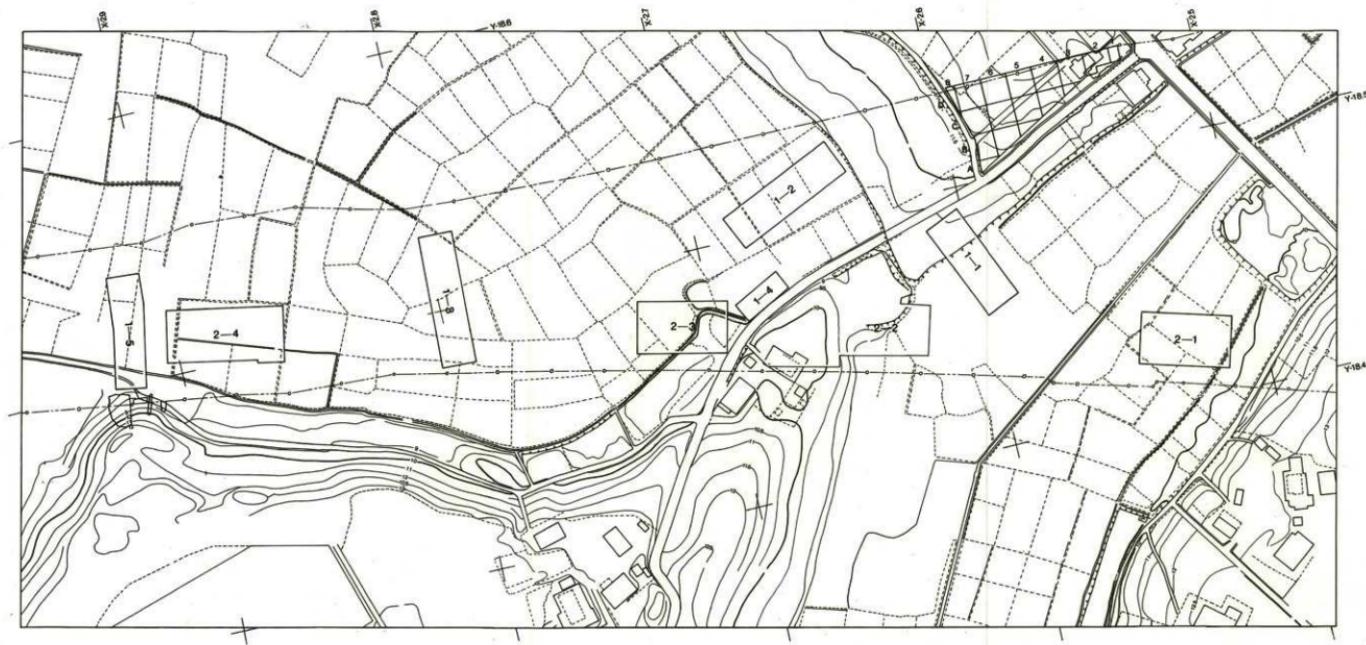
伊奈氏屋敷跡の発掘調査は、東北・上越新幹線建設に県指定「伊奈氏屋敷跡」の一部がかかるため、昭和56年4月13日から昭和56年9月11日にわたり実施されたものである。調査は台地端部及び水田面におよび、特に水田面では鋼矢板を打ち、ウエルポイントにて強制排水した区画を5ヶ所設定した。底湿地からは繩文時代の土器・丸木舟を検出したため新たに4ヶ所区画を設定し調査を進めたものである。

4月 調査は13日より始められた。I-1区、I-2区は排水が終ったので調査を始める。調査は、区内全面を行うと土圧によって鋼矢板が内側に倒れて来てしまうので、階段状に掘っていくことになった。I-1区は、A列・C列を掘る。C列南側で土層断面図を作成することになり、精査しながら掘り下げていく。C-6区の土層断面にコの字形に成形された木の断面が出ており、精査したところ丸木舟であることがわかり、切断されてしまった部分を探したところ舟先を発見し、とりあえず風呂桶に入れて保存する。C-7区で繩文時代後期の土器片を検出する。これらの遺物出土状況から掘り下げは灰褐色粘土層で止めることにする。I-2区は1-2列にまたがり幅3.2mでA~C列で下げ始める。

5月 I-1区、丸木舟を出す。残存長約3.1mと判明。やや上向きに真西に延びている。灰白色粘土層下より土器が出土し、ここからは少しずつ下げ始める。I-2区、土層断面作成途中。I-1区同様丸木舟が検出される。強制排水は続いているのだが水の流入が多く、グチャグチャしている。I-3・4区も調査に入り、階段掘の2段目まで下げる。いずれも土層断面作成を進める。I-5区、B-5グリッドの第2粘土層下の木の実層から漆漁り飾弓が単独で出土する。砂層から多量の木の枝、土器片が出土。土層断面作成途中。

6月 I-1区の丸木舟の全体を出し、実測・写真撮影を行う。その後丸木舟の取り上げ作業を行なう。水分を多量に含んでいるためそのままでは取り上げられないで、舟の上に不織布を掛け粘土を乗せ、木枠を組んだ中に入れて引き上げを行いボリュウタンを流し込み固め蓋をしてから、水槽に漬けておくという形でとりあえず保管した。区画内における発掘区域の範囲を記録し、I-1区の発掘を終了する。I-2区、土層断面作成途中。水の流入が多いため北側に深さ50cmの水抜きトレーナーを入れる。I-3区、遺構、遺物が出土せず、水の流入が多く危険なため、土層断面を作成した後調査を終了する。裏門部分は重機を使用して表土を排土する。続けてI-1区間も表土を排土し、精査を行なった結果、伊奈氏屋敷に伴う溝及び堀状の掘り込みを検出。土壌の部分の調査に入り基盤としている砂面を検出する。台地部は表土剥入する。新たにI-1・2・3・4区を設定し、ウエルポイントを打ち込む。

7月 I-2区、丸木舟を実測・写真撮影しI-1区の丸木舟と同様に取り上げ、調査を終了する。I-5区、白木弓が検出される。土壌下には鉄掘が検出され土層断面平面図を作成、写真撮影を行う。台地斜面部は何も出ず終了、平坦部は、表面精査を続ける。I-4・5区も月末には、多量の土器を取り上げた後、調査を終了する。I-1・2・3・4区は、I区の状態から粘土層まで

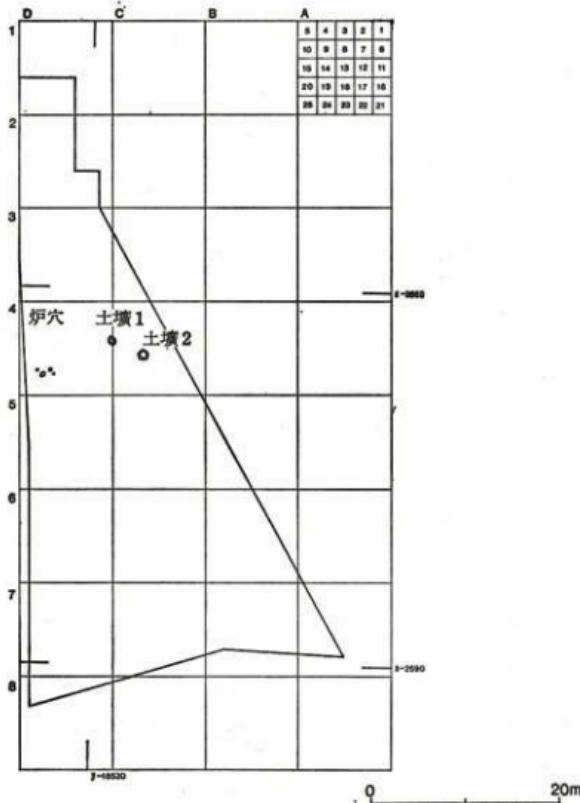


第26図 伊奈氏里敷跡免査区配置図

遺物がないことが確認されたことにより、そこまでは重機により排土し、遺物検出を行う。

8月 Ⅰ-1区は、何も検出されず、土層断面のみを作成しただけで、調査を終了した。Ⅰ-2区では、Ⅰ-4東区から伸びて来た溝が確認された。Ⅰ-3区は屋敷跡と関連するものか、ローム土による埋め立て跡と推察される、端部には杭を打ち、竹の束を敷いてマコモ層の上を埋めた遺構が検出された。粘土層下からは白木弓が検出された。Ⅰ-4区ではⅠ-5区から伸びた砂面が南側で若干認められる。月末にはすべての低湿地での土層断面、発掘区域の範囲を記録し調査を終了する。台地部平坦面では石器の集中個所が認められ検出調査を進める。

9月 石器群の実測・写真撮影を終え、すべての調査を終了する。



第27図 伊奈氏屋敷跡台地部遺構分布図

### 3. 遺構と出土遺物

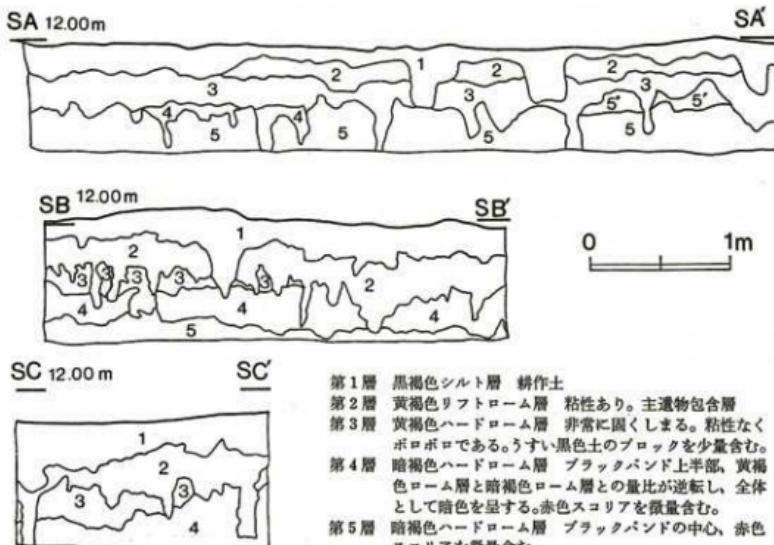
#### (1) 先土器時代

##### 層序

底湿地はマコモ層、粘土層等の堆積状態が認められ細かに層序区分が行なわれた。層序について  
は底湿地の項で述べる。ここでは先土器時代の遺物が出土している台地部の標準層序を見ておくこ  
ととする。作図位置は、地形的に安定している平坦面の3ヶ所で作られた。石器の出土は主に第2  
層から出土している。

本遺跡からは先土器時代の所産と考えられる石器、剝片、碎片等が約160点出土している。おお  
むね標高12mほどの台地肩部及び平坦面から出土している。資料は一部の縄文時代以降の遺物が検  
出された低湿地からも発見されている。低湿地からはナイフ形石器を含む10数点の資料が出土した  
が、それらは後述するように、ごく限られた調査区内でしかも包含層が軟弱であったため、出土状  
況を適確に把握することは困難であった。したがって、低湿地から出土した資料については、平面的  
な出土状態に関する記述はあきらめ、石器の説明にとどめることとした。石器群の平面的な広がり、  
展開については台地上で検出されたものに限って述べることとする。

台地上の資料は、調査区が台地東端部をかすめるように縱断しているため、今回の調査は遺跡の



第28図 伊奈氏屋敷跡地部基本層序図

一部を発掘したにとどまる。調査区の西側に広がる平坦部にはさらに本遺跡の主体部分が展開しているものと予想される。

#### 平面分布（第29図）

台地上における該期石器群は、調査区 280m<sup>2</sup> の範囲から約 150 点出土している。それらの石器群は他の遺跡でも一般的にみられるように、ある限られた範囲にまとまって検出された。本遺跡では約 20m の間隔をおいて、調査区の北側と南側に石器、礫などが集中するところが認められた。便宜的に北側のそれを N 群、南側を S 群と呼ぶ。

N 群の中央部付近にはナイフ形石器 2 点を含む 32 点の石器群がある程度まとめて出土した。これを N<sub>1</sub> ブロックとする。一方 S 群からもナイフ形石器、角錐状石器、石核等を含む石器群、礫などが検出された。全体にまとまりがなく、分布が散漫であるが、あえて S<sub>1</sub>～S<sub>3</sub> の 3 ブロックと礫群 1 ケ所を抽出した。以下、各ブロックを順を追って略述する。

#### N<sub>1</sub>: ブロック

調査区の北端にあり、東側は緩く傾斜している。約 4.5m × 3m の広がりをもつ。ナイフ形石器 2 点が出土したが他はすべて剥片である。ナイフ形石器はブロックの東端と南端からそれぞれ出土し、他の剥片類は南北に細長く帯状に散布している。全体にやや散漫に分布しており、集中度に欠ける。また、本ブロックの北と南に隣接して、拡大の礫の散布がみられ、あたかもブロックを挟むように展開している。これらの礫も含めた N 群全体の広がりは 8.0m × 4.5m ほどである。N 群全体を通観すると、石器、剥片類の視覚的なまとまりであるブロック 1 ケ所と礫群 2 ケ所から構成されていたようである。しかし、それぞれの分布が散漫であったり、隣接しすぎていたためか明確に分離できず、全体にまとまりに欠ける感じを受ける。

#### S<sub>1</sub>: ブロック

S 群の東側に位置しており、台地肩部にかかっている。約 4m × 6m の広がりをもつ。ナイフ形石器 3 点、角錐状石器 2 点、石核 2 点を含む 52 点の石器群からなる。分布の広がり、質量ともに本遺跡中最大の規模をもっている。ブロックの中央部分に剥片類があり、それをとりこむように石器が点在している。また、ブロック内及び周辺部に拡大の礫もみられるが、まとまりがなく散発的である。

なお、礫は大半のものが熱を受けており、表面が赤色に変化し、破損しているものもある。

#### S<sub>2</sub>: ブロック

調査区の西端にあり、S<sub>1</sub> ブロックの西約 7m のところにある。台地の平坦部から肩部にかけて展開するブロックである。約 2m × 3.5m の広がりをもち、南北に細長く分布している。ブロック中央付近に石核が 1 点、さらにブロック東端から東へ 1.5m のところにナイフ形石器が 1 点出土した。

剥片も含め 12 点の石器群からなるブロックであるが、前述した 2 ケ所のブロック同様、出土状況が散漫という感じを受ける。

また、ブロックの北側に接して、ある程度礫がまとまるところがある。これは N<sub>1</sub> ブロックと同じような傾向といえる。ただ、両者を直接結びつける材料がなく、同時に存在したか否か不明といわざるをえない。

また、ブロック中にナイフ形石器を含めたが、やや離れたところからの出土であり、確実に本ブロックに属するかどうかが不明確であるが、ここでは一応含めて考えておく。

#### S:ブロック

S<sub>1</sub>:ブロックの北約3mのところにあり、台地の肩部にかかっている。約0.8m×1.2mほどの狭い範囲に4点の石器群が分布している。1点のナイフ形石器を含み、他は剥片である。

他のブロックにみられるように、周辺に疎の散布を見るが、その量は少なく、N<sub>1</sub>、S<sub>2</sub>:ブロックのように隣接してまとまった疎があるということはない。むしろ、小規模ブロックであるが独立性をもっているとみることができる。

分布範囲、出土石器の量などからみると、他のブロックとはやや性格を異にするようである。

#### 疎群1

S<sub>1</sub>:ブロックの北西約2mのところに占地している。約1.5m×1mの範囲内から挙大の疎30数点が集中して検出された。石材は安山岩系のものが多く、次いで珪岩、砂岩などがみられる。疎の多くは熱を受け変色している。

南端から石核が1点出土しているが、本疎群に伴なうものか否か不明である。ただ、他に剥片、碎片等もないことから、ここで剥離作業がおこなわれたとは考えられず、一応切り離して考えた方がよいと思われる。

また、本疎群はS群の北端にあり、これより北はN群までの間、ブロック、疎群などは認められない。疎の出土層位は石器群のそれと大差なく、4層上面に乗っている。

本遺跡内には、これまでその都度触れてきたように、多量の疎が散布している。しかし、本疎群のように、群を構成していることは稀で、大部分の疎はブロックの周辺を中心、まとまりなく散在している。だが、N<sub>1</sub>、S<sub>2</sub>:ブロックの項で触れたように、ブロックに隣接してやや散漫ながら疎が集中するところがあり、かつては疎群を構成していた可能性もある。

また、遺跡内における遺構は疎群だけで、配石、焼土、炭火物集中地点などは検出されなかった。

#### N:ブロック出土石器（第30図）

2点のナイフ形石器が出土しているが、それぞれ形態を異にする。1は縦長剥片の先端片側部分に、主剥離面側からプランディングを施したもの。他の部位には調整加工された痕跡はなく、剥片の形状を大きく変えることなくナイフ形石器に仕上げている。打面は調整されておらず、基部付近に自然面を一部残している。刃部には細かな刃こぼれ様の使用痕がみられる。先端部は鋭く尖がる。チャート製。2は厚手の横長剥片を用いた、いわゆる切出形石器である。最大幅が中央よりやや基部寄りにあり、先端部分が極端に薄くなっている。プランディングは片側辺にかぎられ、主剥離面側から加えられた剥離面が正面中央付近にまで及んでいる。他の部位には調整加工は施されていない。先端の刃部には使用痕が鋸歯状に残されている。チャート製。8~19が剥片で、形状もそれぞれ異なり、ほとんどのものが使用痕を残している。7と10が凝灰岩で他はすべてチャートである。本ブロックの剥片には小形のものが目立つ。特に17~19のように石刃状の小形剥片が特徴的である。17は厚手であるが片側辺に使用痕がある。使用痕が認められるものとして他に11~15があり、大形の剥片は3、4、8などにみられる。

ナイフ形石器以外はすべて剥片であり、使用痕を有する剥片が主体を占めるブロックといえよう。出土層位は2層から3層にかけてであるが、2層の下部にその主体がある。

#### S: ブロック出土石器（第31図～第37図）

3点のナイフ形石器が出土しているが、それぞれ形態、調整加工、石材などの諸要素を異にしている。一方、素材のいすれかの部位に自然面を残している点では共通している。20は砂質頁岩製の剥片を素材としたものである。基部の片側辺にプランティングを施し、他には特に調整加工された痕跡はない。片側辺には自然面をそのまま残している。打面は調整されていない。先端部はゆるい弧をえがいており、細かな使用痕がみられる。21は片面に大きく自然面を残す縦長の剥片を素材としている。主剥離面側からの片側辺加工で、基部は丸く、先端部は鋭角に尖る。プランティングそのものは粗く、全体に丁寧なつくりとはいがたい。硬質頁岩製。23は小形の縦長剥片の先端部分に僅かにプランティングを施したもの。片側辺に自然面を残し、剥片の形状を大きく変えることなく小形のナイフ形石器に仕上げている。先端部は鋭く尖る。硬質頁岩製。22は黒耀石製の剥片を素材とし、片側辺を鋸歯状に調整加工した石器である。一応鋸歯状石器と称しておく。片面中央部に自然面を残している。打面部、先端部とともに数回の打撃が加えられ、全体が正方形を呈するよう調整されている。24、25は角錐状石器と呼ばれるるものである。24は安山岩製の横長剥片を素材としたもので、正面中央に腹が走り、断面は三角形を呈する。両側辺は粗い調整加工によって形が整えられている。25は大半を欠くが、黒耀石製の角錐状石器である。先端部では横断面は三角形を呈するが、中央部では台形状になる。調整加工は粗く、自然面の残る部分がある。角錐状石器は、今回の調査では本ブロック以外に出土していない。

26、27は石核である。いすれも剥片を素材としているらしい。26は安山岩製の石核で、打面は調整されていない。同じ方向から幅広の剥片を剥取している。剥片剥離面は2面あり、他は主剥離面と自然面で構成されている。27は打面が調整されており、やはり同方向から幅広の剥片を取っている。片面は自然面をそのまま残している。かなり剥離がすんだ段階の資料と考えられる。頁岩製。

28～40までは剥片である。大形品が目立つ。28は石刃状の大形剥片で、片側辺に使用痕が認められる。29、30は厚手の大形剥片で、一部に自然面を残している。僅かに使用痕が残されているが、さほど顕著ではない。31も大形の剥片であるが、先端部が弧状になっており、その部分に使用痕が認められる。正面は厚さ調整のためか、打面部側から何回かの打撃が加えられている。安山岩製である。32は台形状を呈した横長の大形剥片である。一辺が内彎しており、その部分に使用痕が認められる。側辺には僅かだが二次加工も認められる。33は片面に自然面を大きく残す剥片で、側辺部に使用痕がある。34は自然面と主剥離面を大きく残す厚手の剥片である。横方向からの打撃が1回加わっており、その先端部分は鋭い刃部を形成している。刃部には使用痕が認められる。

28～34までの大形剥片には安山岩、砂質頁岩、頁岩などの比較的粒子の粗い石材を用いている。いすれの剥片にも使用痕が認められることから、特に28、31、33などの縦長剥片は目的的剥片として剥離されたものと考えられる。35～40は中形の剥片で、いすれも使用痕が認められる。石材は大形剥片同様、安山岩、砂質頁岩が主体をしめる。使用痕は36～38が顕著で、刃部が鋸歯状になって

いる。

本ブロックの石器群は、今回調査された全ブロックを通じ、質、量ともに充実した内容を有している。特に2点の角錐状石器、安山岩を主体とした大形剥片などは注目される。

#### S:ブロック出土石器（第38図）

41は小形の縦長剥片を素材としたナイフ形石器で、片側辺の先端部分にプランディングを施す。厚手の剥片を用いており、横断面は三角形を呈する。プランディングは雑で、剥片本来の形状を変えずに仕上げている。基部は丸味をおび、先端部が尖る。砂質頁岩製。本資料はブロックからやや離れて出土しており、本ブロックに属するものか否か疑問であったが、一応とりあげておく。

42、43は剥片で、43はS<sub>1</sub>ブロックで多くみられた大形のものである。安山岩製である。打点に近いところに2ヶ所主剥離面側から剥離が加えられているが、他には調整加工等は施されていない。側辺部に僅から使用痕が認められるが顕著ではない。44は石核として分類しておいた。S<sub>1</sub>ブロック出土の石核同様、剥片を素材としている。多方向から求心的な剥離が行なわれている。

#### S:ブロック出土石器（第39図45～47）

45は小形で厚手の縦長剥片を用いたナイフ形石器である。片側辺の基部に近いところ約3ほどを残し、他の縦辺部にプランディングを施す、二側辺加工のものである。基部には打面、バルブがそのまま残り、先端部は鋭く尖る。砂質頁岩製である。46、47は剥片である。いずれも小形で、N<sub>1</sub>ブロック出土の小形剥片と共通するところがある。47は片側辺に使用痕が認められ細石刃様の剥片である。46はチャート、47は黒耀石である。

本ブロックはきわめて小規模のものであり、他のブロックとは趣きを異にする。計4点の石器群で構成されるが、いずれも小形であるというのが特徴的である。

#### 砾群出土石器（第39図48）

最大の砾で構成される砾群中から出土した黒耀石製の石核である。上下両端から小形の剥片を剥取している。裏面は、周辺部に打面調整のための小剥離痕がみられる。今回調査した範囲内からは黒耀石製の剥片が出土しているが、本石核と直接関連するものはみられない。

本砾群からは他に石器、剥片等の出土はない。したがって、出土地点で剥片剥離作業が行なわれたとは考えられない。

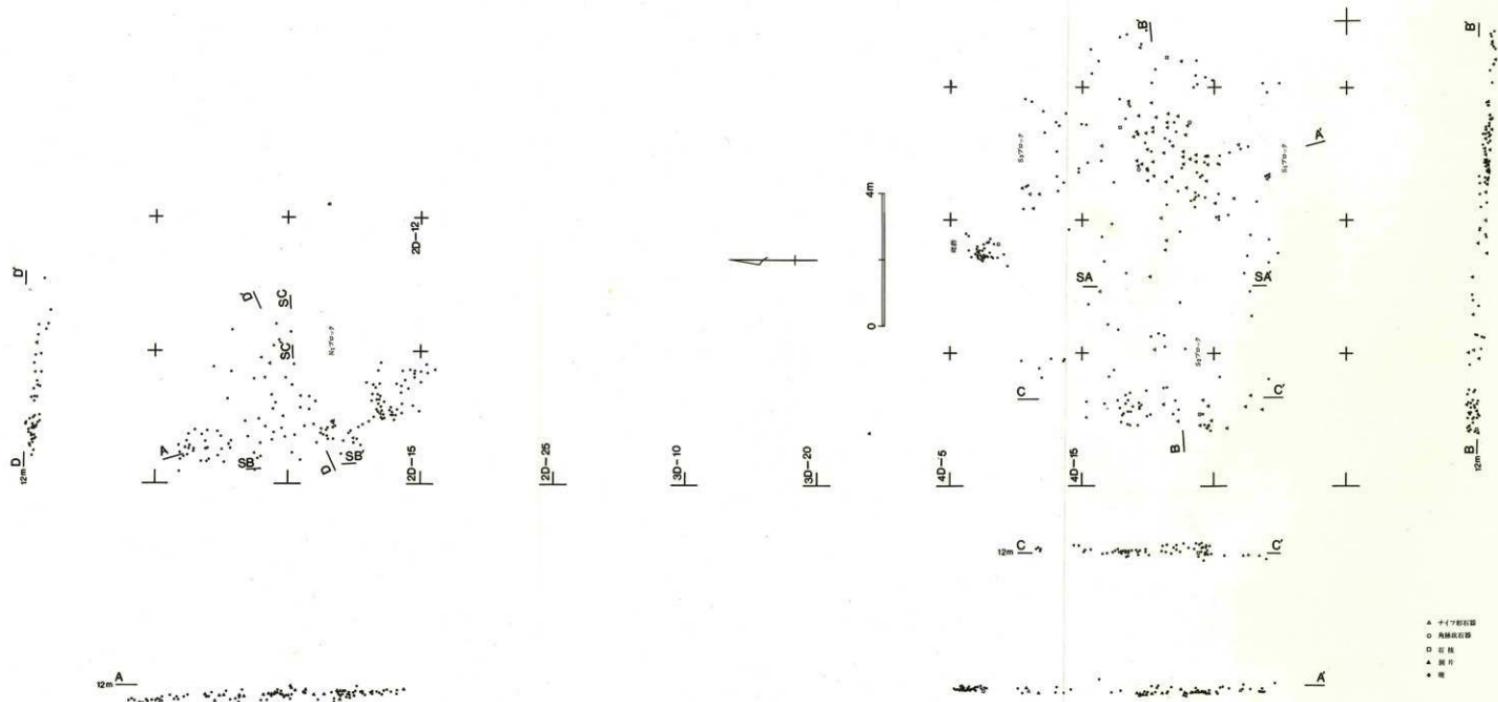
また、図示した石核と砾群との関連については不明である。

#### グリット出土の石器（第39図～第40図）

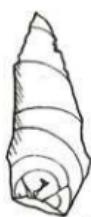
49～59の資料は、前述した各ブロックには属さず、それぞれ単独で出土したものである。

49は透明度の強い黒耀石製の剥片を用いたナイフ形石器で、S<sub>1</sub>ブロックとS<sub>2</sub>ブロックの中間地点から出土した。基部の片側辺に沿ってバルブを除去するようにプランディングが施されている。先端部は剥片が剥離された状態のまま残されており、やや厚く円弧状を呈している。刃部には鋸歯状の使用痕が顕著に残されている。50、51とともに硬質頁岩製の剥片で、鋭い側辺部に使用痕が認められる。53は砂質頁岩の大形剥片であり、一辺に粗い二次加工が施されたもので、削器と呼んでもよいであろう。S<sub>1</sub>ブロックの北側から出土している。

58は小形の剥片であるが、側辺に撓状剥離状の剥離が一条みられるが、アクシデントによってで



第29図 伊奈氏型石器分布図



1



2



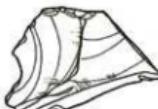
3



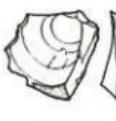
4



5



6



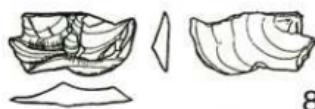
7



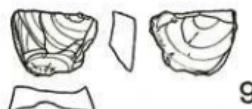
0

5cm

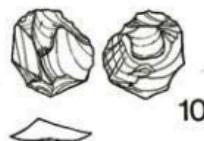
第30図 伊奈氏屋敷跡N<sub>1</sub>ブロック出土石器



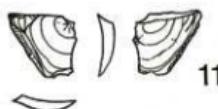
8



9



10



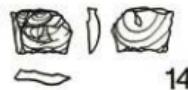
11



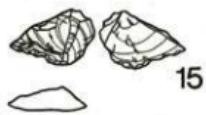
12



13



14



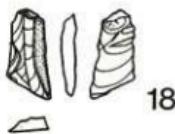
15



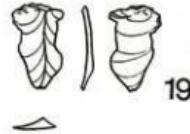
16



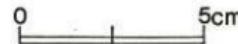
17



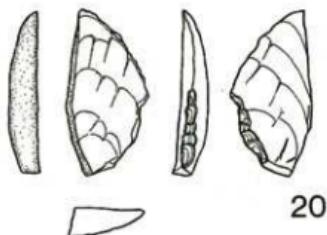
18



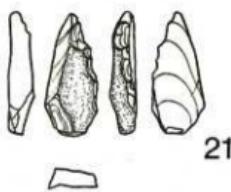
19



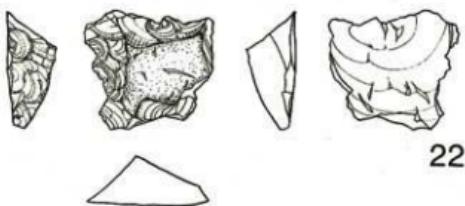
第31図 伊奈氏屋敷跡 S1:ブロック出土石器(I)



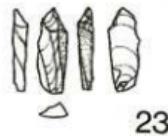
20



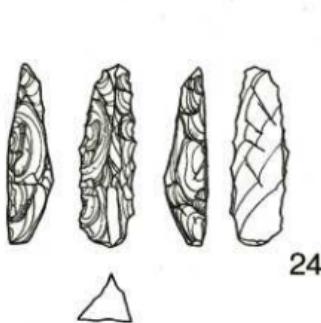
21



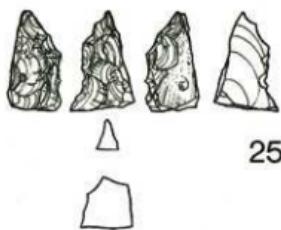
22



23



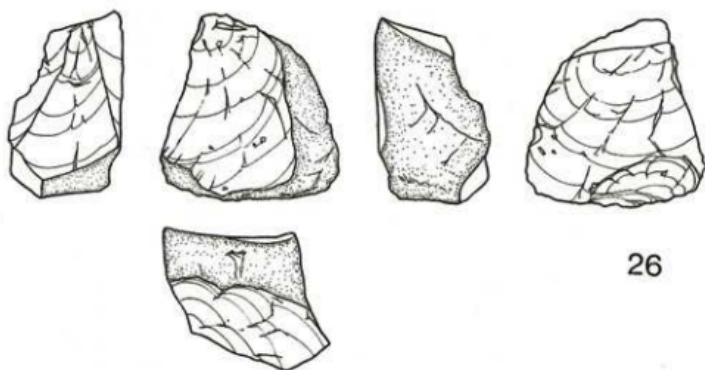
24



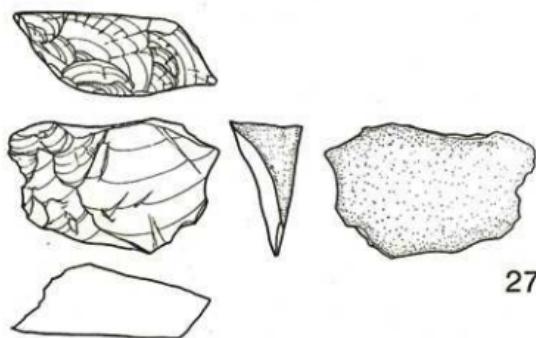
25



第32図 伊奈氏屋敷跡 S1: ブロック出土石器(2)



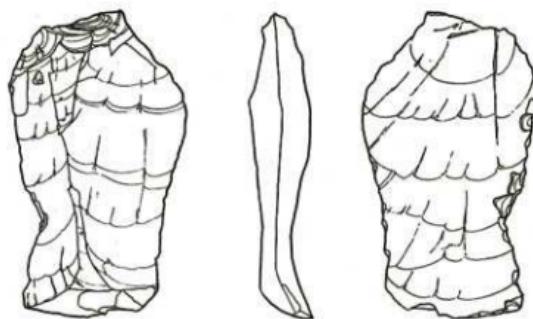
26



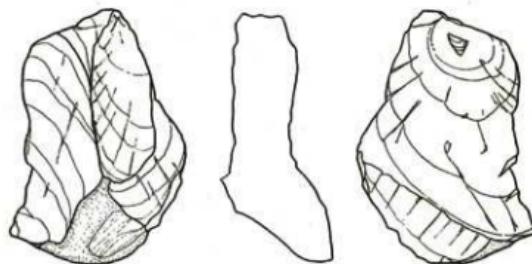
27

0 5cm

第33図 伊奈氏屋遺跡 S:ブロック出土石器(3)



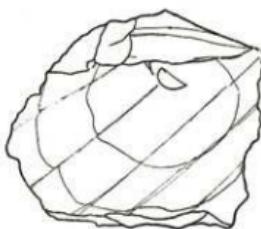
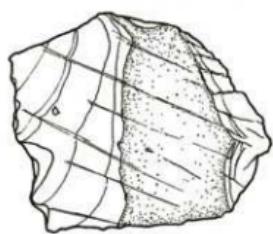
28



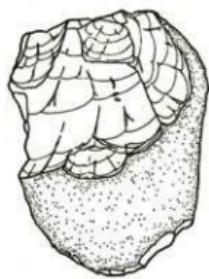
29



第34図 伊奈氏屋敷跡 S1ブロック出土石器(4)



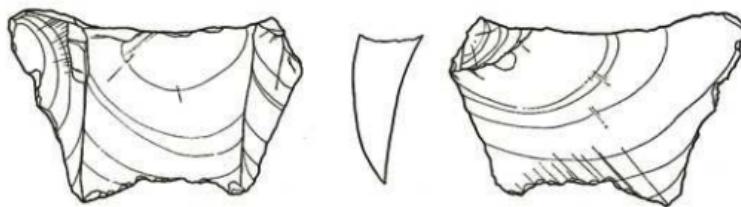
30



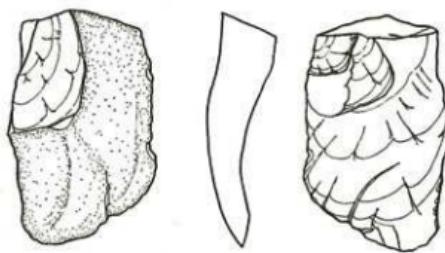
31



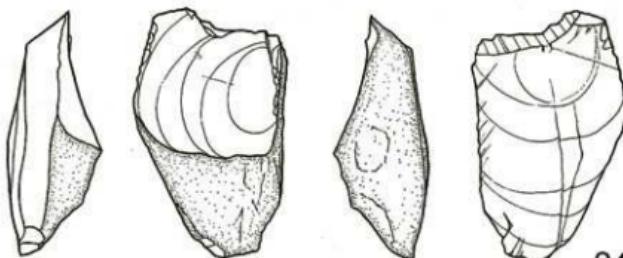
第35図 伊奈氏屋敷跡 S1ブロック出土石器(5)



32



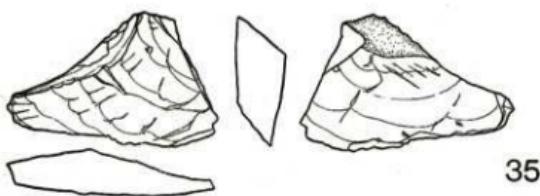
33



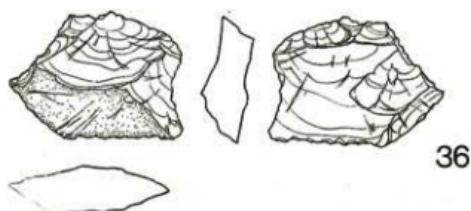
34



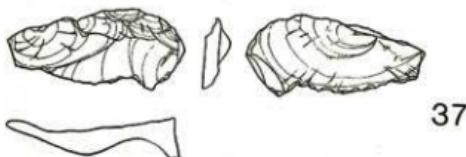
第36図 伊奈氏屋敷跡 S:ブロック出土石器(6)



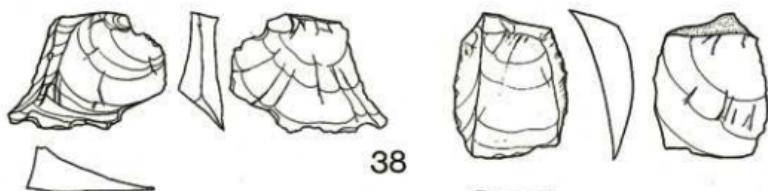
35



36

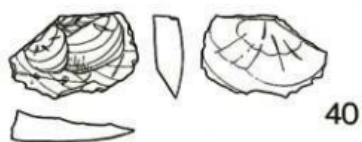


37



38

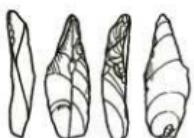
39



40

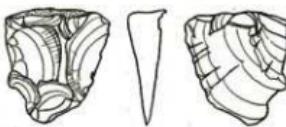
0 5cm

第37図 伊奈氏屋敷跡 S:ブロック出土石器(?)



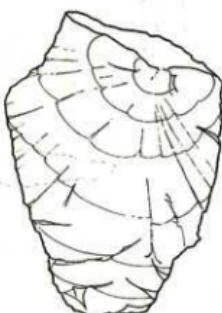
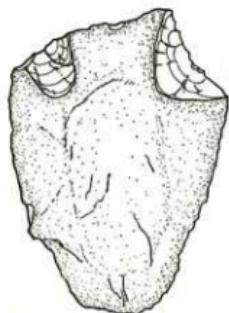
△

41

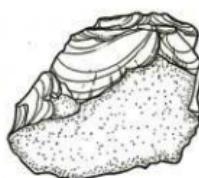
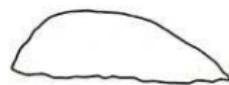


△

42



43

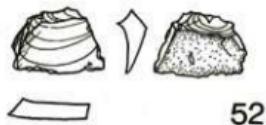
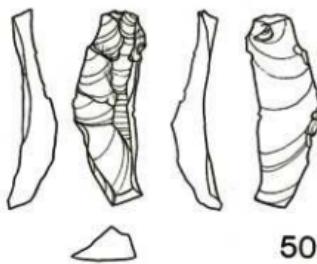
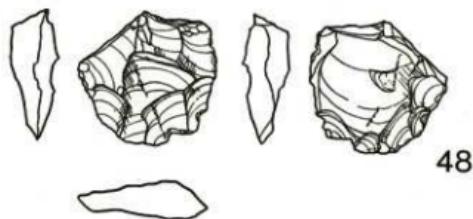
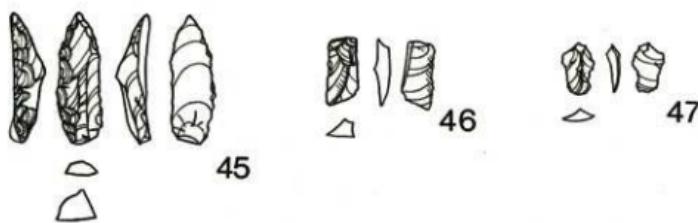


44



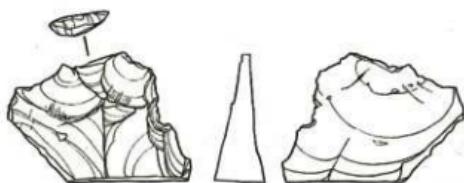
0 5cm

第38図 伊奈氏屋敷跡S<sub>1</sub>：プロツタ出土石器

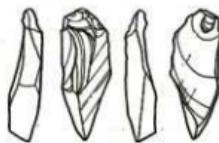


0 5cm

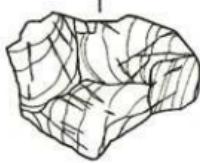
第39図 伊奈氏屋敷跡 S<sub>1</sub>ブロック・硯器・グリッド出土石器



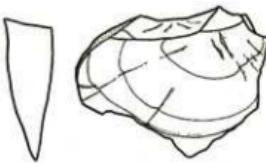
53



54



55



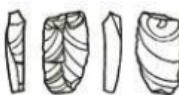
56



57



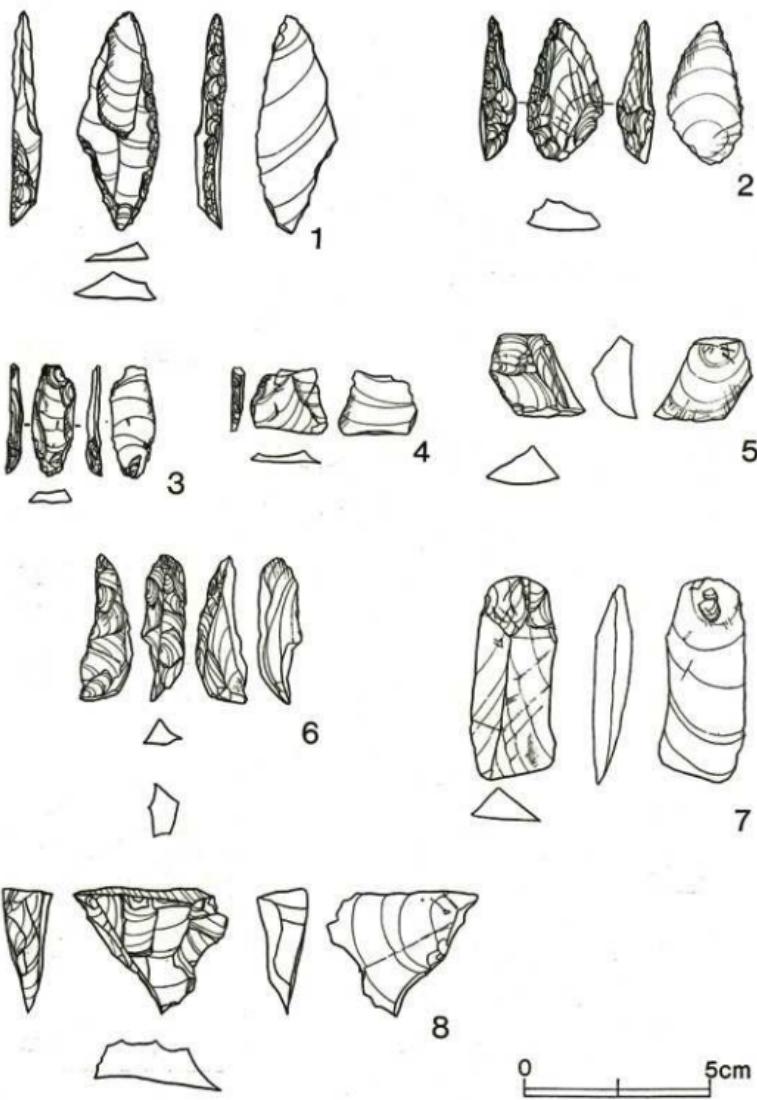
58



59



第40図 伊奈氏里敷脉グリッド出土石器



第41図 伊奈氏屋敷跡低湿地出土石器

きた新しい剥離面である。彫刻器ではない。図示した剥片には、多少のちがいはあれ使用痕が残されている。

#### 低湿地調査区出土石器（第41図）

1～4はナイフ形石器である。4点それぞれ形態を異にする。1は二側刃加工のナイフ形石器で三角形を呈し、プランティングによりバルブは除去されている。厚さ調整のためか正面中央に打面部側から縱長の剥離面が一枚みられる。プランティングは主剥離面側から正面に向かって行なわれ、基部、先端部とも鋭角に仕上げられている。硬質頁岩製。2は黒曜石製の厚手の剥片を用いたもので、打面とバルブの一部が除去されている。片側刃加工で、プランティングは入念に施されている。基部は丸味をおびるが、先端部は鋭角に仕上げられている。刃部には使用痕が認められる。3は小形で薄手の剥片を用いた基部加工のナイフ形石器である。打面、バルブはそのまま残されている。先端部に剥離面が二面みられるが、プランティングとはいがたく、使用痕と考えられる。硬質頁岩製。4は薄手の剥片を用いたナイフ形石器であるが、上下両端を欠いている。片側刃加工のものと考えられるが、プランティングは難である。破損品のため、詳細はしりえない。硬質頁岩製。5は厚手の剥片で使用痕が認められる。6は黒曜石製の調整剥片。7はやや厚手の縱長剥片で、二次加工、使用痕などは認められない。打面部に頭部調整のためにY字形の調整痕が残る。チヤート製。8は黒曜石製の石核である。剥片を素材としている。打面は平坦な自然面で、小形の縱長剥片を剥離している。

#### (2) 繩文時代

##### a. 台地部

###### 遺構

###### 炉穴1（第42図）

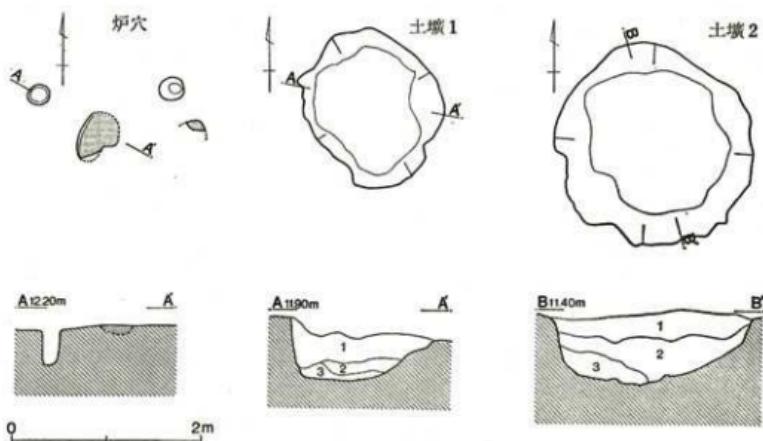
4D-19, 20グリッドで検出された。柱穴が2本、焼土の2ヶ所が長径100cm、短径60cmの範囲で認められた。焼土は浅い。遺物は条痕の土器片が少量出土している。

###### 1号土壤（第42図）

4C-10, 15, 4D-6, 11グリッドから検出された。長径85cm、短径70cm、深さ25cmを測る。楕円形を呈し、壁はなだらかに立ち上る。遺物は検出されていない。土層は第1層茶褐色土、部分的に黒色土を含み、しまりなく、粘性がない。第2層くすんだ茶褐色土、ロームブロックを含み、硬い層である。第3層茶褐色土、柔かくしまりがない。粘性はややある。

###### 2号土壤（第42図）

4C-14, 19グリッドより発見された。長径110cm、短径100cm、深さ40cmを測る。平面形はほぼ円形を呈している。断面は鍋底状を呈し、壁はなだらかに立ち上がる。遺物は検出されていない。土層は第1層茶褐色土、部分的にロームブロックを含み、粘性がない。第2層茶褐色土、1層より黒味を帯びている。中央は黄味を帯びている。しまりがわるく、粘性なし。第3層茶褐色土、2層と同様だがロームブロックを若干含んでいる。

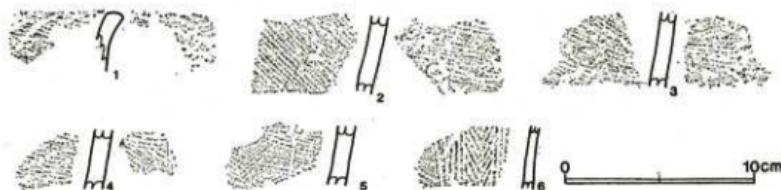


第42図 伊奈氏屋敷跡台地部炉穴・土壤

### 遺物

#### グリッド出土土器 (第43図1~6)

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
43-1		口唇部が平坦で、緩く外反した口縁部形態を呈する。内外面共に斜方向の条痕が施されている。口縁部には貝殻腹縁による圧痕が巡る。	多量の繊維を胎土に含むため空洞が目立つ。砂粒も含まれている。焼成は良いが器面が荒れている。色調は茶褐色を呈する。	
	2 3 4	内外面とも斜行する条痕が認められるものである。	2, 3は、多量の繊維と白色粒を含み、器面は荒れている。焼成はやや不良である。色調は暗褐色を呈する。4の繊維の含有量は少く、焼成は良好である。色調は橙褐色を呈する。	



第43図 伊奈氏屋敷跡台地部グリッド出土土器

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
43-5		櫛齒状工具による条線が斜方向に施されるものである。	胎土に砂粒を含む。焼成は良好である。色調は、内部が黒褐色、外面が褐色を呈する。	
6		竹管状工具により、縦方向、矢羽状の集合沈線が施される。	胎土に小石粒を多量に含む。焼成は良好である。色調は橙褐色を呈する。	

### b. 低湿地

発掘調査区は伊奈氏屋敷跡に関する遺構を検出するためにまず5区が設定された。そこで丸木舟の検出、繩文土器片の検出を見、新たに、遺物を包含していると思われる所を4ヶ所設定した。

調査は鋼矢板で囲った中をウェルポイントにより強制排水を行ないやや水分が少なくなった所で調査が進められた。

最終的に遺物を包含している層に至るまでには、2~3段下げられるため調査は区全体の約4分の1になってしまった。I区の時点では上面から調査が行なわれ、遺物が認められるのが第2粘土層以下と判明したため、II区の調査では第2粘土層上面まで重機で除去し、調査が行なわれた。

面図の見方について説明を加えておきたい。グリッド設定は、最下部の遺物出土面で行なわれ、東から西にI-4、南から北へA-Lに分割したものであり、内部をさらに4分した。

A-A'等記してあるものは土層断面を作図した位置である。■マークは幅30cm×30cm、厚さ5cmで植物遺体用土をサンプリングしたブロックの位置を記入したものである。サンプリングされた土は水洗され、木の種子等の検出を行った。

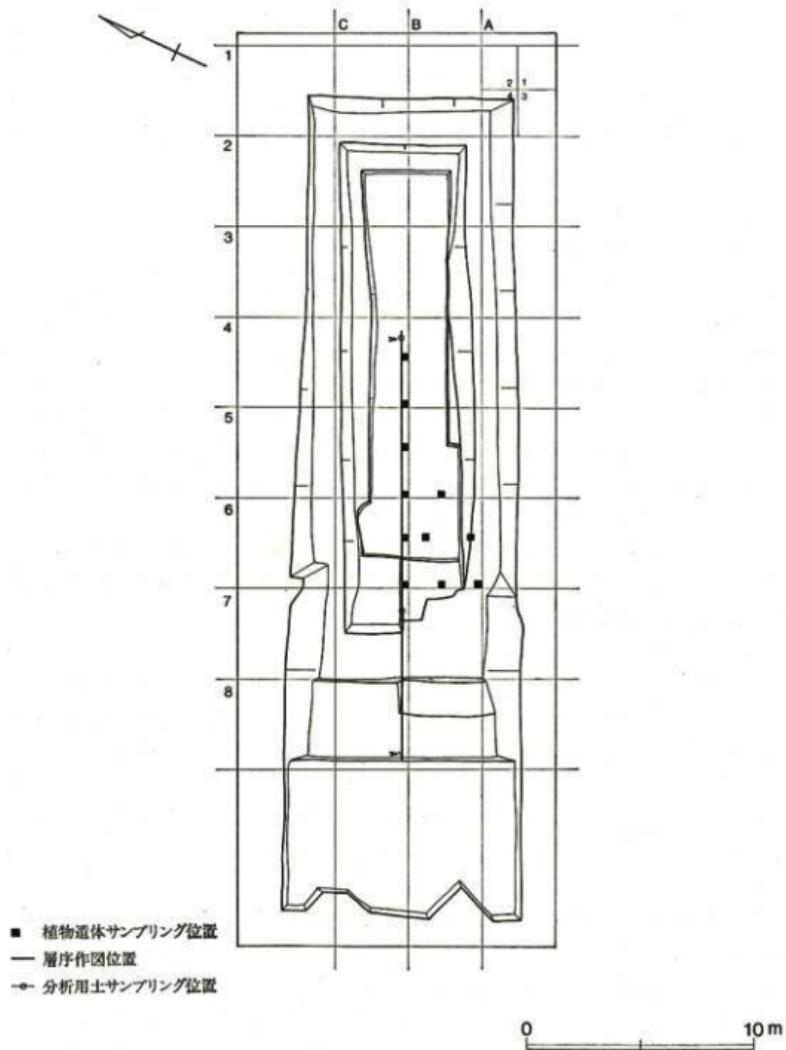
次に各区の概略説明を行う。

I-1区(第44・45図) 40m×14m。西部は台地にかかっており矢板部分から17m付近までは序々に下って来たローム層が認められる。やや東に寄った泥炭層で丸木舟が出土している。遺物は主に泥炭層から出土しており、西に行くに従い、低い位置から出土している。B-7区の土層断面部からは花粉調査のサンプリングが行なわれている。

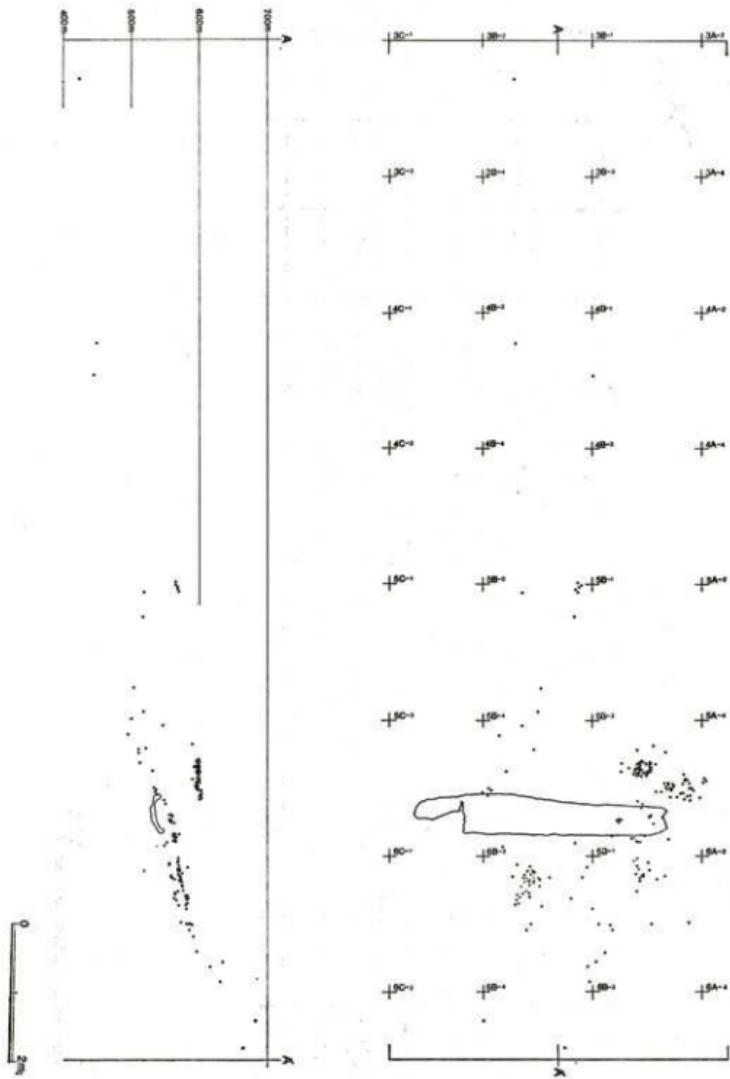
I-2区(第46図) 49m×14m。I-2区で丸木舟が出土している。土器片等の出土はあまり多くない。丸木舟出土面まで調査は進められたが、水の流入が多いため標高4.5m前後で終了している。

I-3区(第47図) 51.5m×13.5m。台地部から離れて設置したため、マコモ及び泥炭が厚く堆積しており、遺物はまったく認められなかった。水の流入も非常に多く、矢板も内側に傾き危険が生じたため、土層断面のみ作成し、調査を終了した。

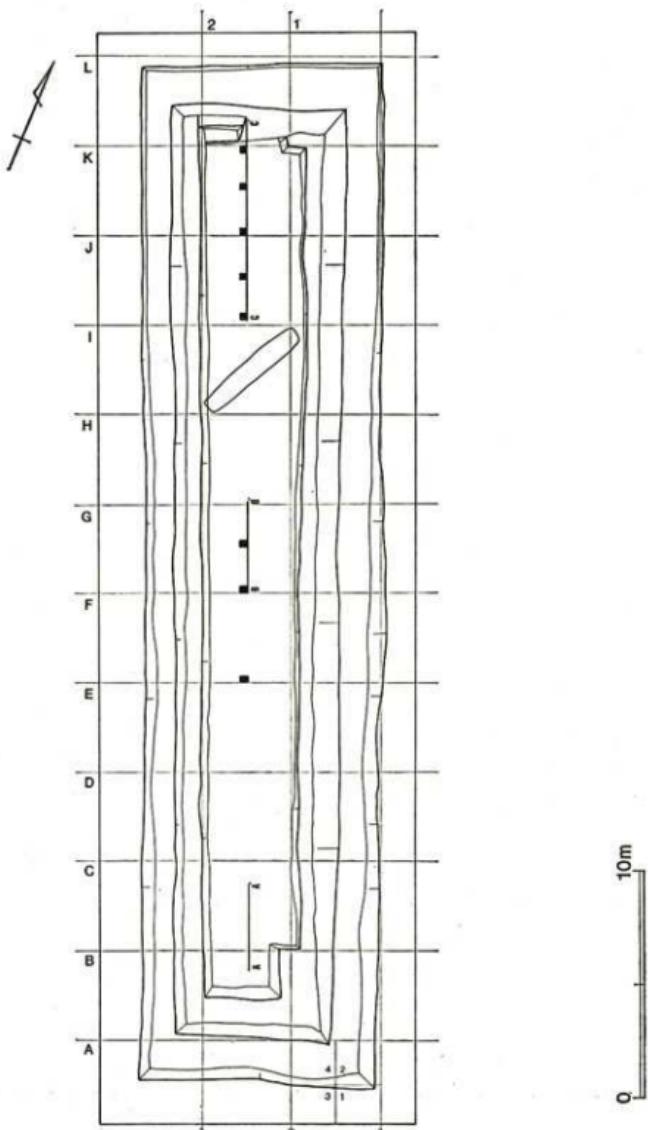
I-4区(第48・49図) 21m×8.5m。伊奈氏屋敷跡は台地部が1度括れ、島状を呈した所に位置しているが、この括れた所の水田面に設置したものであり、遺物が最も多く出土した区である。標高5.7m付近で集中して遺物が出土している。また丸木舟片も出土している。尚、台地部からのローム面は認められていない。



第44図 伊奈氏屋敷跡 I-1区グリッド割付け図



第45図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—1区遺物分布図



第46図 伊奈氏屋敷跡I—2区グリッド割付け図

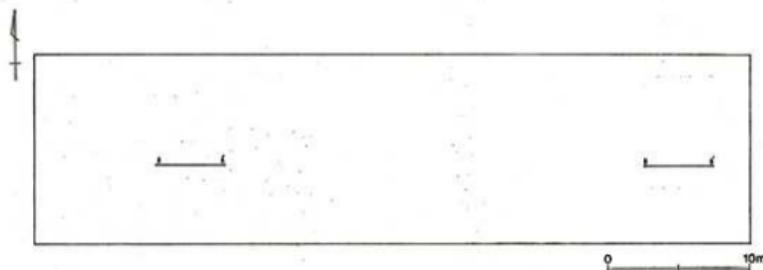
I-5区(第50・51図) 43m×12m。伊奈氏屋敷跡南西端に台地部に直交し、東西に長く設置したものである。台地部からの砂質の層が東側から20m付近まで認められ、この層から土器片、木製品(弓)、焼けた樹木、木の種子が多數検出された。砂層の下は青白色の粘土層であり、基盤と考えられる。西に行くにしたがい砂層は下にさがってしまい、泥炭層となっている。この泥炭層中から、漆塗りの弓が検出されている。

I-1区(第52図) 35m×20m。上部で若干の泥炭が認められたが、青白色の基盤が出、遺物も認められず調査は終了した。

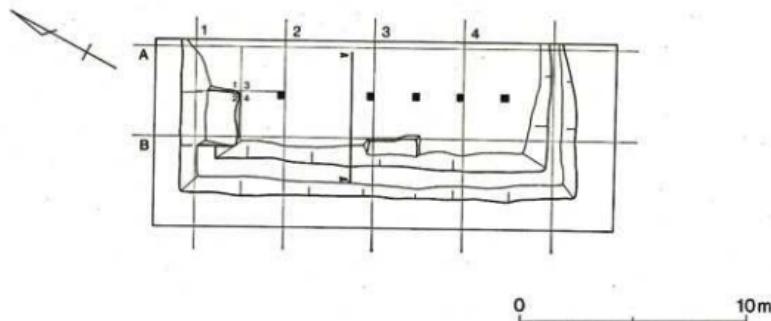
I-2区(第53図) 20m×20m。伊奈氏屋敷跡の乗る台地部と台地の間を区切る溝の一部が確認された。

I-3区(第54・55図) 35m×20m。北東部の水田面直下にローム土による埋め立てが認められた。端部では土の崩れを防ぐための杭列が検出された。泥炭中では土器片、木製品が比較的多く出土している。尚、北東部では最下面にローム面が認められた。

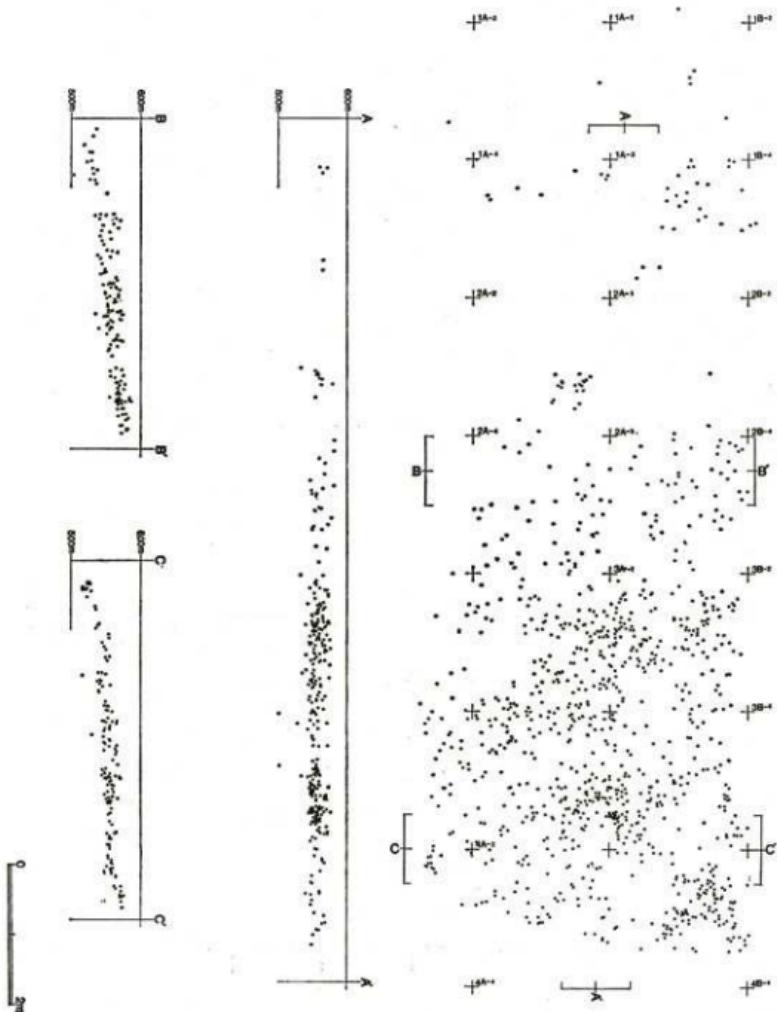
I-4区(第56・57図) 39.5m×20.5m。南北に長い区であるが南側では5区から続いている砂層が認められた。砂層上面には台地部から倒れた大木が存する。漆塗櫛が出土している。



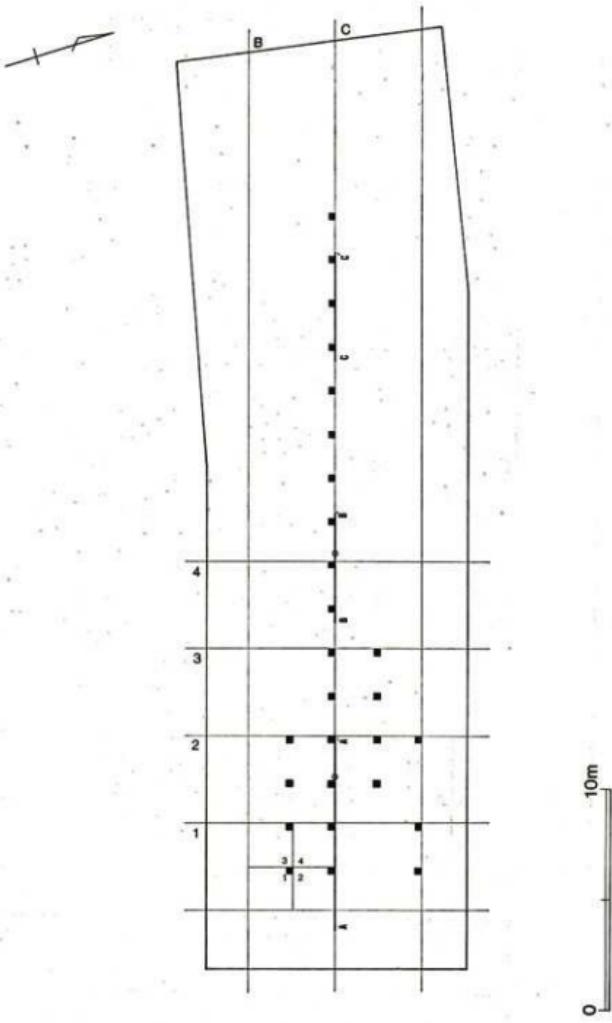
第47図 伊奈氏屋敷跡I-3区グリッド割付け図



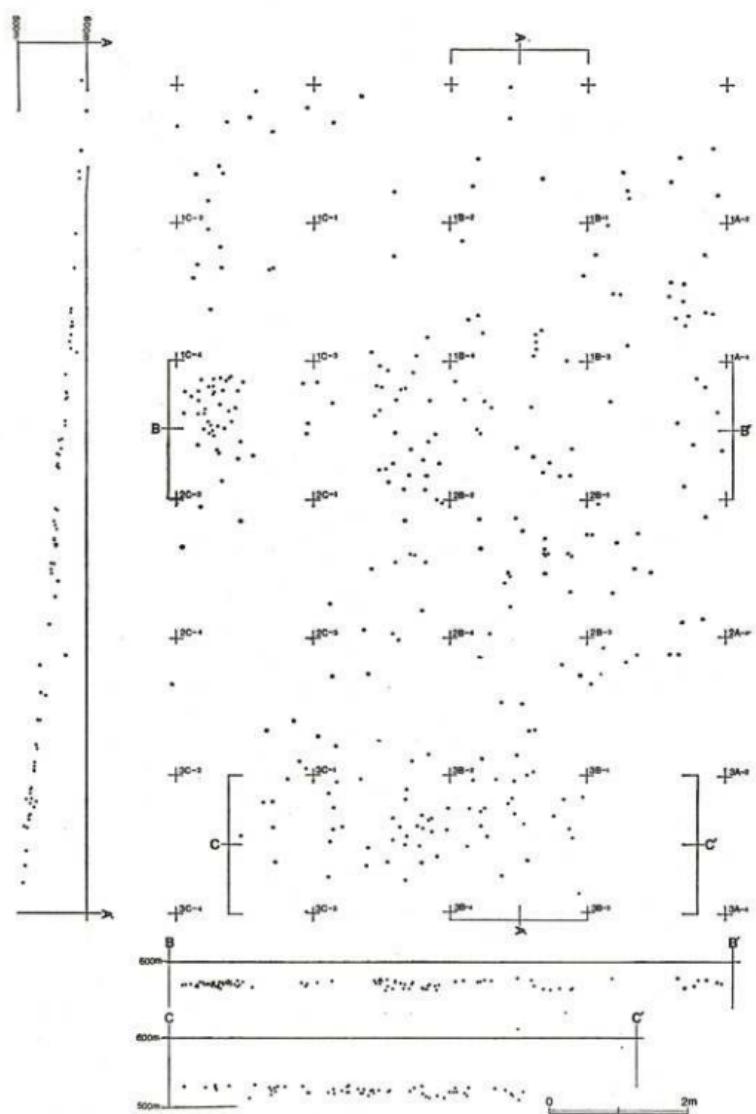
第48図 伊奈氏屋敷跡I-4区グリッド割付け図



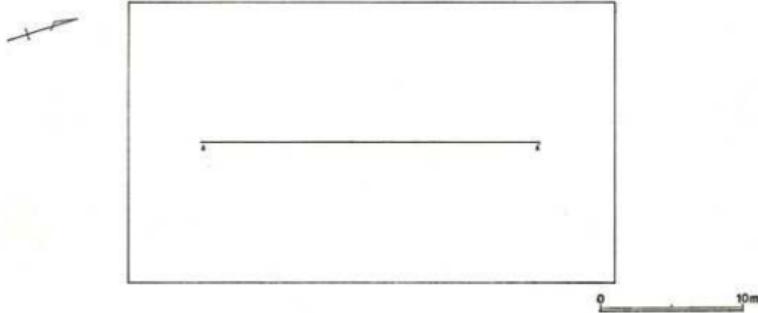
第49図 伊奈氏屋跡 1-4区遺物分布図



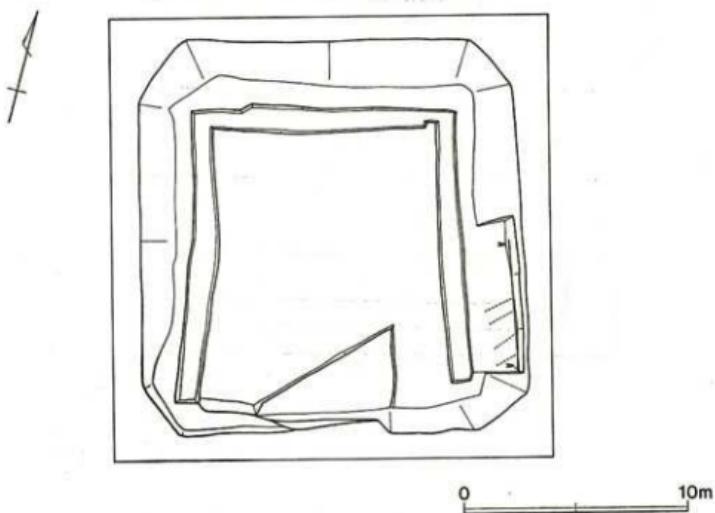
第50図 伊奈氏里敷跡I—5区グリッド割付け図



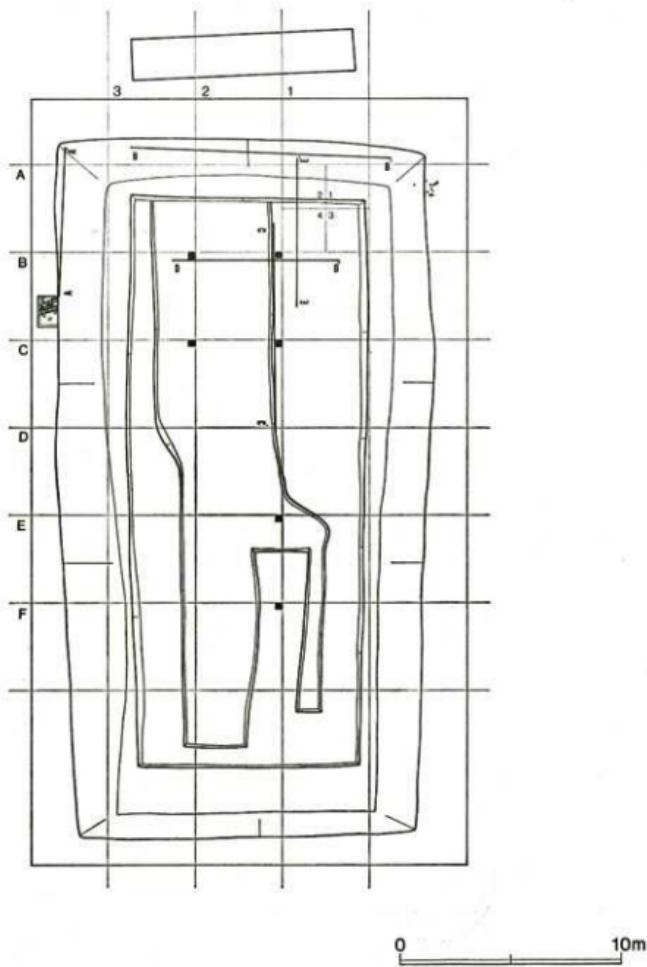
第51図 伊奈氏型数跡I-5区遺物分布図



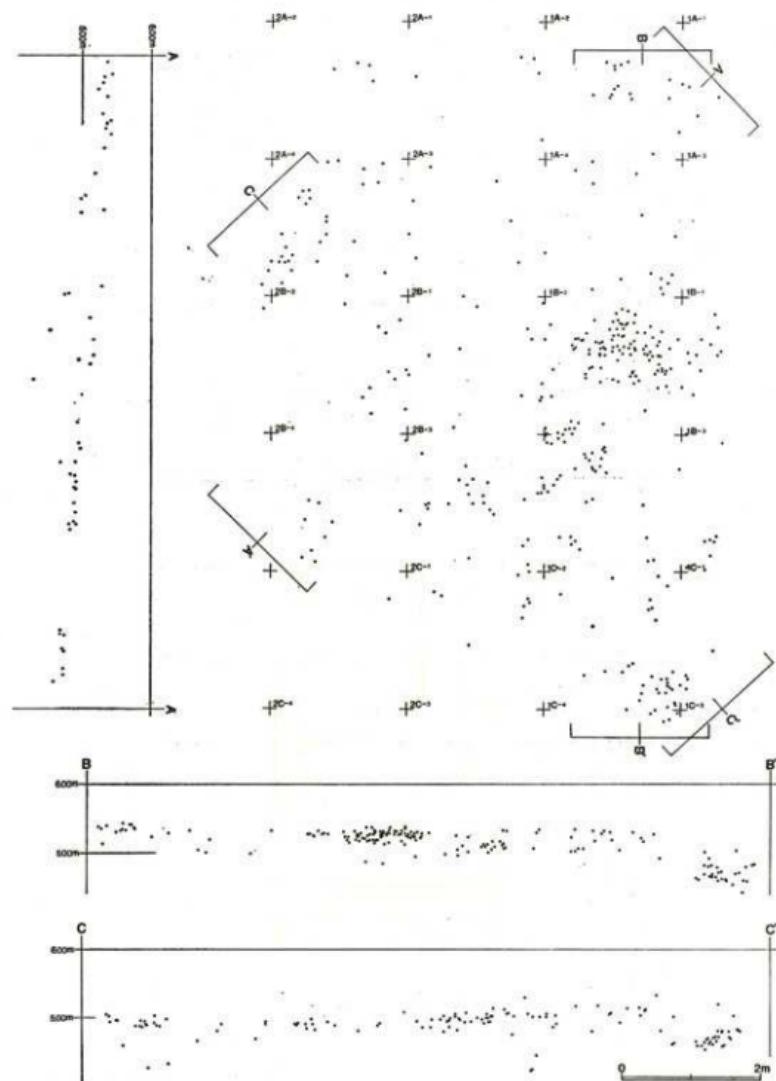
第52図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—1区グリッド割付け図



第53図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—2区グリッド割付け図



第54図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—3区グリッド割付け図



第55図 伊奈氏屋跡Ⅰ—3区遺物分布図